

# 悪魔の聖書

## 聖書の正体

### 血の掟

- 1 神は一人の人間のたった一度の違反行為のためにすべての人間を永遠に呪う  
：[ローマ人の手紙. 5:12](#), [ローマ人の手紙. 5:17-19](#), [1. コリント人への手紙. 15:21](#), [22.](#)
- 2 神は一つの創造物/人間を欠陥物にしてしまったがゆえにすべての生き物を溺死させる  
：[創世記. 6:5](#), [7](#), [創世記 6:17](#), [創世記. 7:23](#).
- 3 有罪者の代わりに無罪者が呪われた：[創世記. 9:20-22](#), [24-25](#). 後に教会は、裸の父を見てしまったハムの子孫は黒人の祖先で、それゆえ奴隷扱いを正当化した。
- 4 神は人間に犠牲を求めた：[レビ記. 27:28](#), [29](#), [ヨシュア記. 6:17](#), [エレミヤ書. 7:30](#),  
[エゼキエル書. 20:25](#), [26](#) 及び [ミカ書. 6:7](#). [創世記. 22:2](#), [9](#), [10](#) 参照:(アブラハム-イサク)
- 5 そして: ジェプザー(Jephthah)、彼は自分の娘を神の食欲の為に丸焼きにした  
：[士師記. 11:29-31](#) 及び [11:34](#), [39](#).
- 6 神のお気に入りの男が、神の怒りを静めるため、罪のない七人の男を打ち殺させた  
：[サムエル記下. 21:1](#), [3-6](#), [9](#), [14](#), 及び[民数記. 25:4](#).
- 7 神はファラオの心を頑なにし、他の犯罪も犯させた  
：[出エジプト記. 7:3](#), [4](#), [13](#), [出エジプト記. 10:1](#), [20](#), [27](#), [出エジプト記. 14:17](#) 及び  
[出エジプト記. 7:20](#), [21](#); [9:3](#), [6](#); [9:19](#), [23](#), [25](#).
- 8 神は真夜中の殺人犯：[出エジプト記. 12:29](#), [30](#) 及び [出エジプト記. 11:3-6](#).
- 9 神は奴隷制度を『奇貨』とした：[出エジプト記. 21:2](#), [4-6](#) 及び [レビ記. 25:44-46](#).  
新約聖書も奴隷制度を『奇貨』とした：[ペテロの第一の手紙. 2:18](#), [テモテへの第一の手紙. 6:1](#),  
[テトスへの手紙. 2:9](#), [エペソ人への手紙. 6:5-8](#) 及び [コロサイ人への手紙. 3:22](#).
- 10 自分の娘を売ってもいい：[出エジプト記. 21:7](#).
- 11 遠く住んでいる民族の男性を毆殺し、その女性と子供を奴隷にせよと神が命令した  
：[申命記. 20:10-15](#).
- 12 近隣民族であるヘテびと、アモリびと、カナンびと、ペリジびと、  
ヒビびと及びエブスびとは残らず大虐殺せよと神が命令した：[申命記. 20:16](#), [17](#).
- 13 奴隷は時間をかけて毆殺してもかまわない：[出エジプト記. 21:20](#), [21](#).
- 14 魔女たちは殺されなければならない：[出エジプト記. 22:18](#), [レビ記. 20:27](#), [申命記. 18:10](#),  
[ガラテヤ人への手紙. 5:19](#), [20](#). 魔術は宗教と同じく明らかに空想の世界のものだった。  
ですからここでも無罪者の処刑が求められている。
- 15 占い師に相談しただけで死刑：[レビ記. 20:6](#).
- 16 偶像崇拜と異端も死刑  
：[出エジプト記. 22:20](#), [申命記. 13:1](#), [2](#), [5](#), [14](#), [15](#), [申命記. 17:2-5](#), [申命記. 18:20](#).
- 17 宗教観の異なる兄弟、娘、息子、妻たちは殺されなければならない：[申命記. 13:6-11](#).
- 18 冒涇者、不敬者、思い上がり者は皆死刑  
：[民数記. 15:30](#), [申命記. 17:12](#), [民数記. 5:2](#), [4](#); [12:14](#) 及び[申命記. 23:1-3](#).
- 19 土曜日に働く者は皆死刑(日曜日に休んで土曜日に働くキリスト教の信者も皆死刑)  
：[出エジプト記. 31:14](#), [15](#).
- 20 竈に火をつけると死刑：[出エジプト記. 35:2](#), [3](#) 及び [31:14](#).

- 21 薪を拾うと死刑：[民数記. 15:32, 35-36.](#)
- 22 ユダヤ教の過ぎ越しの祭りを無視すると死刑：[民数記. 9:13.](#)
- 23 発酵したパンを食べると死刑：[出エジプト記. 12:15](#)；[12:19.](#)
- 24 生け贄の肉を食べると死刑：[レビ記. 7:21.](#)
- 25 肉の脂を食べると死刑：[レビ記. 7:22-25.](#)
- 26 血を飲むと死刑：[レビ記. 3:16, 17](#)；[レビ記. 7:26, 27](#), [レビ記. 17:10-16.](#)
- 27 割礼をしない男子は死刑：[創世記. 17:14.](#)
- 28 個人用に香油を作ると死刑：[出エジプト記. 30:22-38.](#)
- 29 残り物を食べると死刑：[レビ記. 19:5-8](#) 及び [7:18.](#)
- 30 聖職者を介せず生け贄を捧げると死刑：[レビ記. 17:8, 9.](#)
- 31 神に捧げ物をせず畜殺をすると死刑：[レビ記. 17:2-9.](#)
- 32 儀式を間違えると死刑：[レビ記. 7:20, 21](#) 及び [22:3, 9.](#)
- 33 聖殿を触ると死刑：[民数記. 4:15](#) 及び [サムエル記下. 6:6-7.](#)
- 34 神聖な機器に触れると死刑：[民数記. 18:3.](#)
- 35 聖なる幕に侵入する異人に死刑：[民数記. 18:7.](#)
- 36 聖殿を見ると死刑：[民数記. 4:20.](#)
- 37 鈴を鳴らさずに聖殿に入ると死刑：[出エジプト記. 28:34, 35.](#)
- 38 亜麻布のズボン履かないまま聖殿に入ると死刑：[出エジプト記. 28:42, 43.](#)
- 39 不潔な人に死刑 [この不潔とは衛生上の汚れではなく、儀式的、観念的なもので、宗教の儀式を受けてない人または物に触れること。  
不潔な物とは例えば動物の死体や豚肉、牡蠣、海老や蟹、梟、鷹、烏、鷺、鷺、はげ鷺、コウノトリ、白鳥、ペリカン、鶺鴒、タゲリ、さらにコウモリや吸血鬼などの羽毛のない鳥類、ならびに四足の鳥類(?)のすべてなど]：[レビ記. 11:4-27](#), [レビ記. 11:39](#), [レビ記. 22:5, 6](#), [民数記. 19:20](#), [レビ記. 22:3, 9](#), [民数記. 19:13.](#)
- 40 自然に死んだ動物の肉、あるいは獣に殺された動物の肉を食べると死刑：[レビ記. 22:8, 9](#), [レビ記. 17:13-16](#), 及び [申命記. 14:21.](#)
- 41 贖罪の日に自分の体を折檻しないと死刑：[レビ記. 23:29.](#)
- 42 贖罪の日に少しでも仕事をすると死刑：[レビ記. 23:30.](#)  
(今日のイスラエルでは安息日にエレベーターのボタンを押さずにすむように、どの階でも自動的に止まる「安息日用エレベーター」がある。)
- 43 幕屋に近づくと死刑：[民数記. 1:51](#)；[18:22](#)；[17:13.](#)
- 44 聖職者に近づくと死刑：[民数記. 3:10](#)；[18:7, 3:38.](#)
- 45 神を冒瀆すると死刑：[レビ記. 24:11-23.](#)
- 46 処女を結婚前に失った少女、処女でも初夜に出血しない少女には死：[申命記. 22:20-21.](#)
- 47 処女膜が完全でない聖職者の娘は火あぶりの刑：[レビ記. 21:9.](#)
- 48 姦通者に死刑：[申命記. 22:22.](#)
- 49 強姦に死刑：[申命記. 22:23-24.](#)
- 50 強姦された時に大声で叫ばなかった少女に死刑：[申命記. 22:24.](#)
- 51 月経中にセックスすると死刑：[レビ記. 20:18.](#)
- 52 神は忍耐強くない者を焼き殺した：[民数記. 11:1.](#)
- 53 神は変化に富んだ食事を要求する人々を殺す：[民数記. 11:4-6, 31, 33-34.](#)
- 54 神はモーセにミデアン人の大虐殺を命令する。ミデアン人はモーセがエジプト兵から逃げた時以来 40 年間もモーセを客としてもてなしていた。しかし、忘恩の徒モーセに、神はミデアン人を皆、女達と男性の子供を含めて、殺せと命じた。ただ、処女達は戦利品となり、兵士、聖職者、さらには神自身の慰安婦として生き残ることを許された。  
：[民数記. 31:1-2, 9-11, 14-18, 32, 35, 40.](#)

- 55 火付け法を誤った聖職者を神は焼き殺してしまった：[レビ記. 10:1, 2.](#)
- 56 神は逆らった人々を地震や火事や疫病で殺す  
：[民数記. 16:3, 20-22, 27, 31-33, 35.](#) [民数記. 16:49.](#)
- 57 神は文句を言う者に毒蛇をもって応える：[民数記. 21:5, 6.](#)
- 58 神に対する愛が足りないと惨事、早魃、熱病に見舞われる：[レビ記. 26:16.](#)  
収獲もない：[レビ記. 26:20.](#) 子供は獣に食われ、土地は不毛になる：[レビ記. 26:22.](#)
- 59 神に逆らって歩むと神の復讐は七倍重く、疫病に苦しみ、敵の手に渡される  
：[レビ記. 26:23-25.](#)
- 60 神の呪い：“あなたがたは自分の息子の肉を食べ、また自分の娘の肉を食べるであろう”  
[レビ記. 26:29.](#)
- 61 神はある民族(女たち子供を含む)の全虐殺を手伝う：[申命記. 2:30, 34.](#)
- 62 バシャンでの大虐殺：[申命記. 3:6.](#)
- 63 神の命令：七つの民族の大虐殺：[申命記. 7:1-6,](#) [申命記. 20:6, 17.](#)
- 64 神の汚い武器：殺害の熊蜂：[申命記. 7:20, 21.](#)
- 65 ヨシュアはエリコの人々を皆奉納物として滅ぼす。  
ただ協力した娼婦のラハブと彼女の一族を生き残す事を許した：[ヨシュア記. 6:17-21.](#)
- 66 ヤエルは信頼を裏切って残虐な殺人をする：[士師記. 4:9-24.](#)
- 67 それに対する神の誉め言葉：[士師記. 5:24-31.](#)
- 68 神は、サムソンの愚かな賭博の借金を払うための三十人の殺人の補助正犯となる  
：[士師記. 14:19.](#)
- 69 動物虐待と放火罪：[士師記. 15:4, 5.](#)
- 70 神は、一千人のペリシテ人の殺人の補助正犯となる：[士師記. 15:14-15.](#)
- 71 平凡な市民の虐殺：[士師記. 18:6-27.](#)
- 72 丁度また箱の中にしゃがんでいる神がベニヤミン族の虐殺を命じる：[士師記. 20:27, 28.](#)
- 73 敬虔な求婚する方法：親族の皆を殺す事：[士師記. 21:7-14.](#)
- 74 神は 50,070 人を殺す。なぜならば、彼らはある箱の中を見てしまったから  
：[サムエル記上. 6:19.](#)
- 75 神は、400 年前の罪で、赤子と用畜を含めたすべてのアマレク人の虐殺を命じる  
：[サムエル記上. 15:1-3, 8.](#)
- 76 “嬉しそうにサムエルの所に来た”アマレク人の王アガグを主の前で切り刻むサムエル  
：[サムエル記上. 15:33.](#)
- 77 ダビデ、神の好みの男、は 200 人のペリシテ人を殺し、死体から包皮を切り取る  
：[サムエル記上. 18:27.](#)
- 78 ダビデは殺人、強盗、恐喝をして生きている  
：[サムエル記上. 27:8, 9](#) 及び [サムエル記上. 25:5-13.](#)
- 79 ダビデは、復讐のためイスラエルに侵入したが誰も殺さずユダヤ人をただ捕虜にした  
アマレク人に、大虐殺こそ本当のやり方だと見せつける：[サムエル記上. 30:2-18.](#)
- 80 神は神の箱を倒れない様に支えたウザを殺す：[サムエル記下. 6:6-7.](#)
- 81 ダビデはモアビ人の捕虜の三分の二を殺す：[サムエル記下. 8:2.](#)
- 82 ダビデは馬の足の筋を切断する：[サムエル記下. 8:4.](#)
- 83 ダビデはウリヤの妻を誘惑し、そしてウリヤを死に追いやる：[サムエル記下. 11:2-15.](#)
- 84 神の男ダビデは、キリスト教の宗教裁判官の様にアンモンの人々を鋸、おの、つるはし  
や鉄の道具での拷問の末、彼らをナチとクロアチのウスタチャ(カトリックのファシスト  
政府、1941-45)同様大きな煉瓦造りの炉で焼き殺す  
：[歴代志上. 20:3](#) 及び [サムエル記下. 12:31.](#)
- 85 1956 年、聖書のこの個所はアウシュビッツの大虐殺を連想させるとの理由でルーテル派

の聖書協会により“煉瓦工場の労役につかせた”との表現に変えさせられた。  
私の手元にある日本版の聖書にもそう書いてある。聖書の言葉は変わり易いのだ。  
永遠の真実とは何だろうか？

- 86 ダビデの人口調査に反対の立場である神は七万人の男性を(女性と子供は別)天使に殺させる：[歴代志上. 21:1-15](#), [サムエル記下. 24:15](#).
- 87 ダビデは臨終の床に至るまで、復讐心から殺人を命じる：[列王紀上. 2:5-9](#).
- 88 神の予言者は政治的、宗教的な大虐殺を引き起こす  
：[列王紀上. 21:20-24](#), [列王紀下. 9:6-10](#), [列王紀下. 10:10](#), [11](#), [16-19](#), [25](#), [28](#), [30](#).
- 89 神の従者で大量殺人者、エリヤは天からの火で二回大尉と 50 人を焼き殺す  
：[列王紀下. 1:10-12](#).
- 90 エリヤは競争相手の聖職者 450 人を冷酷に殺す：[列王紀上. 18:40](#).
- 91 エリシャをいじめた子供 42 人は熊に引き裂かれ殺された：[列王紀下. 2:23-24](#).
- 92 神の天使は一晩で 185,000 人を殺す：[列王紀下. 19:35](#).
- 93 子供は父親の身代わりに罰せられる  
：[イザヤ書. 14:21](#), [出エジプト記. 34:7](#), [民数記. 14:18](#).
- 94 信心深い夫ならびに父親は、外国の妻とその子供を捨てなければならない  
：[エズラ記. 10:2-3](#).
- 95 神はサタンとの信心試しの為にヨブを苦しめ、ヨブの子供、召使い、羊を殺すことをもいとわない：[ヨブ記. 1:12-19](#).
- 96 神は予言者を彼らを虐殺する為に騙す：[エゼキエル書. 14:9](#).
- 97 “あなたの嬰兒を取って岩に投げ打つ者は幸いです！” [詩篇. 137:9](#).  
ラスカサス(Bartolomé de LasCasas)ドミニコ会の宣教師(1474-1566)は、  
中米を征服したスペイン人が実際にインディオの赤ちゃんを母のおっぱいから引き離し、  
岩に投げつけ殺したのを目撃したと書き、ところで、アフリカからアメリカへの黒人の  
輸入は、インディオを守るためのラスカサスのアイディアだった。
- 98 奇妙な慈しみについて：[詩篇. 136:2](#), [10](#), [15](#), [17-21](#).
- 99 **残虐行為**が延々と続く  
：[哀歌. 2:21](#), [哀歌. 3:10](#), [11](#), [ホセア書. 13:7](#), [8](#), [エゼキエル書. 6:12](#), [13](#), [エゼキエル書. 13:6](#), [9](#), [16-18](#), [ナホム書. 1:2-3](#), [5-6](#), [ハバクク書. 3:5](#), [ゼパニヤ書. 1:2](#), [3](#).
- 100 **新約聖書も旧約聖書の残虐行為を正当化する**  
：[ルカによる福音書. 16:31](#), [マタイによる福音書. 5:17-19](#), [ルカによる福音書. 16:17](#),  
[テモテへの第二の手紙. 3:15](#), [16](#), [ヨハネによる福音書. 5:39](#), [46](#), [47](#), [ルカによる福音書. 24:25](#), [27](#), [ヘブル人への手紙. 11:17](#), [30-31](#), [ヤコブの手紙. 2:21-25](#).
- 101 新約聖書は人間の恐れや悩みを地獄での永遠の苦しみににより倍増する  
：[マタイによる福音書. 18:8](#), [マタイによる福音書. 25:41](#), [46](#), [マルコによる福音書. 9:43-48](#), [ルカによる福音書. 12:5](#), [マタイによる福音書. 10:28](#), [マタイによる福音書. 23:33](#), [ルカによる福音書. 16:23](#), [24](#).
- 102 聖ヨハネは、自ら地獄を語ることで有頂天になる  
：[ヨハネの黙示録. 14:9-11](#)；[19:1](#), [3-4](#), [20](#)；[20:1-3](#), [10](#).
- 103 天国にいる敬謙なキリシチャンは地獄で拷問される人々を見て大喜びする  
：[ヨハネの黙示録. 19:1-9](#).
- 104 人類の大部分は地獄へ行かなければならない  
：[ヨハネの黙示録. 21:8](#), [1](#), [コリント人への手紙. 6:9](#).
- 105 神の呪詛：異教者は皆地獄へ落ち、永遠に苦しまなければならない  
：[ヨハネの黙示録. 21:8](#), [1](#), [コリント人への手紙. 6:9](#).
- 106 神の存在を知らない人は皆は呪われている

- ： [テサロニケ人への第二の手紙](#). [1:7-9](#), [使徒行伝](#). [4:12](#), [詩篇](#). [9:1](#)(特に [18](#)).
- 107 怒る者や他人をばか者呼ばわりする者は地獄の火に： [マタイによる福音書](#). [5:22](#).  
イエス自身は同胞を愚かな盲目な人、蛇、まむしの子ら等と呼ぶ
- ： [マタイによる福音書](#). [23:17](#), [ルカによる福音書](#). [11:40](#), [ルカによる福音書](#). [24:25](#),  
[マタイによる福音書](#). [3:7](#), [マタイによる福音書](#). [12:34](#), [マタイによる福音書](#). [23:33](#).
- 108 不信心と不倫の報いは火と硫黄の燃えている池へ： [ヨハネの黙示録](#). [21:8](#),  
[ヨハネによる福音書](#). [3:36](#), [ルカによる福音書](#). [12:46](#), [マルコによる福音書](#). [16:16](#).
- 109 金持ちに呪い
- ： [マタイによる福音書](#). [19:24](#), [ルカによる福音書](#). [6:24](#), [ルカによる福音書](#). [16:19-31](#).
- 110 罪の洗剤は血である： [ヨハネによる福音書](#). [1:7](#), [ヘブル人への手紙](#). [9:22](#), [28](#),  
[ヘブル人への手紙](#). [9:12-14](#), [10:29](#), [マタイによる福音書](#). [26:28](#), [使徒行伝](#). [20:28](#),  
[エペソ人への手紙](#). [1:7](#), [コロサイ人への手紙](#). [1:20](#), [ヨハネの黙示録](#). [1:5](#),  
[ヨハネの黙示録](#). [5:9](#), [ペトロ第一の手紙](#). [1:2](#), [ヨハネの黙示録](#). [7:14](#).
- 111 父は自ら造った罪人に対しての報復を止める前に、自分の息子に**残酷**な死を要求する
- ： [ヨハネによる福音書](#). [3:16](#), [2:8](#), [コロサイ人への手紙](#). [1:19-20](#), [ガラテヤ人への手紙](#).  
[3:13](#), [テモテへの第一の手紙](#). [2:5-6](#), [エペソ人への手紙](#). [2:13](#), [16](#), [ローマ人の手紙](#).  
[3:24](#), [15](#), [ローマ人の手紙](#). [4:25](#), [ローマ人の手紙](#). [5:1](#), [6](#), [8-11](#).
- 112 神は人が迷って地獄に落ちる為嘘をつく： [テサロニケ人への第二の手紙](#). [2:11](#), [12](#).
- 113 人がイエスの教えを理解せず救われない様に、イエスはわざと理解出来ない事を言う
- ： [マルコによる福音書](#). [4:11](#), [12](#).
- 114 神は人が地獄から救われない様にわざと人の“心をかたくなになさった”
- ： [ヨハネによる福音書](#). [12:39](#), [40](#).
- 115 予定説：人間は無力で、地獄から自力で抜けられない。
- ： [ローマ人の手紙](#). [9:9-13](#), [16](#), [18](#), [21-22](#).
- 116 予定説：すべては神によって定められた
- ： [ローマ人の手紙](#). [8:29](#), [30](#), [ローマ人の手紙](#). [11:7-10](#), [エペソ人への手紙](#). [1:4](#), [5](#),  
[ヨハネの黙示録](#). [17:8](#), [ヨハネの黙示録](#). [20:15](#).
- 117 二律背反：良い行いはどうでもいい、信じる事がすべて
- ： [ローマ人の手紙](#). [4:5](#), [8](#); [5:1](#); [6:18](#), [22](#); [8:33](#), [使徒行伝](#). [13:39](#), [1](#), [コリント人への手紙](#).  
[6:12](#), [1](#), [ヨハネによる福音書](#). [3:9](#); [5:1](#), [ルカによる福音書](#). [14:26](#).
- 118 理想化した人食い風習： [ヨハネによる福音書](#). [6:53-56](#).
- 119 自分の財産の一部を所有し続けようとした夫婦が殺された
- ： [使徒行伝](#). [4:34](#), [35](#); [5:1-3](#), [5-11](#).
- 120 キリスト教に抵抗した人が盲にされた： [使徒行伝](#). [13:8-11](#).
- 121 報復欲をぶちまける神の最後の行動： [ペトロ第一の手紙](#). [4:7](#), [ルカによる福音書](#). [17:29](#),  
[30](#), [ペトロ第二の手紙](#). [3:7](#), [10](#), [ローマ人の手紙](#). [2:5](#), [マタイによる福音書](#). [25:41-46](#).
- 122 神の最終解決 [ヨハネの黙示録](#). 特に： [1:13-16](#), [2:18](#), [22](#), [6:4](#), [8:1-13](#), [9:1-20](#), [14:10](#), [11](#),  
[19](#), [20](#), [15:1](#), [16:1-21](#), [17:16](#), [18:8-24](#), [19:12](#), [15](#).
- 123 **斯くして、神はモーゼまで殺した。(申命記 32 章・48～52 節)**

**根絶**

**六大差別**

宗教・人種・文明・制度・職業・貧富

**日本義塾 主宰 新村紘宇二**

# 悪魔のささやき

人間を嘲笑い破滅させる、ささやきの正体

加賀乙彦

## 悪魔とは何か

### 人間を試す存在として生み出された悪魔

二〇〇六年の春に日本でも公開された『エミリー・ローズ』という映画をめぐって、アメリカでは、果たして悪魔は本当に存在するのか否かという論争が巻き起こりました。すさまじい形相に変わったヒロインが背中をエビのように反らせたシーンをテレビ・コマーシャルで使ったために、「悪魔のイナバウアーはやめろ」と荒川静香選手のファンなどから批判が殺到したという、あの映画です。

原因不明の激しい麻痺と幻覚に苦しみ続けていたエミリーという女子大生が、自分は悪魔に取り憑かれてしまったのではないかと疑い、一人の神父に助けを求めます。神父に言われて精神科医に処方された薬を飲むのをやめ、悪魔払いの儀式を受けたところ、儀式の最中に死亡してしまい、神父は過失致死罪で起訴される。検察側の証人である精神科医の診断によれば、エミリーは「精神病状態をとまなう癲癇」。一方、神父の弁護士は、彼女が本物の「悪魔憑き」だったことを立証しようとする……。

宗教を持たない人間には、いかにも絵空事と思えるストーリーですが、一九七〇年代に旧西ドイツで実際にあった裁判をベースにしたもの。悪魔の存在が法廷で争われたことが本当にあったのです。主人公のモデルとなったドイツ人の少女は、十九歳のとき悪魔に憑依され——彼女自身も神父もそう信じていました——やはり悪魔払いの儀式のために治療を中断した結果、二十三歳で亡くなっています。

人間に悪魔や悪霊が憑く「悪魔憑き」という現象は、キリスト生誕以前から人々のあいだで広く信じられてきました。ユダヤ教の聖典を集めた『旧約聖書』のサムエル記にも、イスラエル王国の初代の王となったサウルが悪魔に憑かれて苦しむ話が書かれています。『新約聖書』になると、神の子であるイエスの力を示す奇跡として、イエスが難病に苦しむ人々を治すと同時に悪霊を追放するシーンが数多く出てくる。とくに有名なのが、ルカ、マルコ、マタイの三つの福音書に記されている悪霊が人から豚に移るエピソードです。「はじめに」で簡単に述べましたが、もうすこし詳しく紹介しておきましょう。

ガリラヤ湖の対岸に着いたイエスと弟子たちの前に、もう長いこと悪霊に憑かれ、裸で墓場に住んでいる男がやってきます。イエスが「汚れた霊よ。この人から出て行け」と命じると、男は「どうか私を苦しめないでください」と叫び、さらに名前を問うと「私の名はレギオンです。私たちは大ぜいですから」と答える。レギオンとは、もともとはローマの軍団のことで、大きな数の比喩。つまり、男にはたくさんの悪霊が取り憑いていたわけです。悪霊たちはイエスに、「底知れぬ所に行け、とはお命じになりませんように」「私たちを豚の中に送って、彼らに乗り移らせてください」と懇願し、イエスの許しを得ると男の身体から出て豚に入ります。すると、その地で飼われていた豚の群れがいきなり狂ったように走り出し、次々に崖から湖へと落ちて溺れ死んでいく……。

もちろん現代科学では悪魔の存在を認めていませんし、悪魔憑きという現象も医学的に説明できると考えられています。癲癇の発作やウィルス性の脳炎のような身体的疾患に起因しているとか、統合失調症や解離性人格障害——いわゆる多重人格です——などの精神疾患のせいだとか、アルコール依存症やドラッグの影響だとか、その人の気質や心理状態からくるとか、それらのいくつかが複合しているとか、あるいは単なる演技だとか。

一方、カトリックでは現在も悪魔払いを認めており、祈りと断食によって悪魔を払うローマ教皇庁公認のエクソシストが世界に数百人いると言われています。バチカンも、悪魔憑きに見える現象の多くは医学的理由や気質などによるとし医師の診断を重んじてはいますが、依然として本当に悪魔に取り憑かれたケースもあると考えている。二〇〇五年にも、ローマにある教皇庁公認のレジナ・アポストロールム大学でエクソシスト講座なるものが開かれ、百人の神父が受講したそうです。

さて、皆さんはどうお考えになるでしょう。映画『エミリー・ローズ』のように、もし悪魔の存在を問う裁判で陪審員に選ばれたとしたら、どんなジャッジをくださいますか。

カトリック系の上智大学で教鞭をとっていたころ、親しくなったイエズス会の神父さんの一人に「悪魔はいると思いますか？」とストレートに聞いてみたことがあります。彼はしばらく考え、「やっぱり、いるでしょう」と答えた。「じゃあ、天使はどうですか？」と尋ねると、これまた相当考えてから「天使のほうは、私はいないと思います」と言う。「じゃあ、なぜ悪魔はいるとお思いになるんですか？」。その問いに対する答えは、こういうものでした。

「すべてを造ったとされている神は、悪魔もお作りになった。なぜなら、人間を試すために必要でしたから。人間が神に背くよう仕向けることによって信仰の強さを試す存在、それが悪魔なんだと思います」

『旧約聖書』のヨブ記には、こんな記述があります。ある日、神のもとに天使たちが集まって、あれこれ報告していたとき、サタンもやってきた——サタンについてはあとで詳しく述べます。ここでは悪魔の別名と考えておいてください——。神が、ウツの地に住むヨブという男の人間性と信仰の厚さを誉めたたえると、サタンが反論します。自分の利益になるから神を敬うのであって、大事なものを失えばヨブだって神を呪うはずだ、と。そこで、神とサタンはヨブの信仰を試す賭けをするわけです。サタンが次々に起こす四つの災いによって、ヨブは全財産と十人の子供すべてを失ってしまいます。さらに、頭のとっぺんから足の裏までひどい皮膚病にかかり、灰のなかに座って素焼きのかけらで身体中をかきむしっても耐えがたいほど苦しめられ、姿かたちまで変わってしまう。それでも信仰を保ち続けるヨブでしたが、見舞いに来てくれた親友たちの同情や激励、さらには偉そうな忠告の言葉に傷つき、激高し、やがて神に対する不信や非難、怒りの言葉を口にしはじめるのです。

イエスもまた、パプテスマのヨハネから洗礼を受けたのち悪魔に試されています。『新約聖書』のなかでも非常に重要なシーンですからご存じの方も多いと思いますが、マタイによる福音書に沿って概略を紹介しておきましょう。

御霊に導かれ荒れ野で四十日と四十夜にわたり断食をし、空腹を抱えたイエスの前に〈試みる者〉が現れ、〈あなたが神の子なら、この石がパンになるように、命じなさい〉と語りかける。するとイエスは、例の有名な言葉で言い返します。〈人はパンだけで生きるのではなく、神の口から出る一つ一つのことばによる〉。正確には、〈……と書いてある〉と答えるんですけどね。モーセが神と交わした契約をつづった申命記にそう書いてある、と。次に悪魔はイエスをエルサレムに連れて行き、神殿のとっぺんに立たせて、〈あなたが神の子なら、下に身を投げてみなさい。『神は御使いたちに命じて、その手にあなたをささえさせ、あなたの足が石に打ち当たることのないようにされる。』と書いてありますから〉と誘いかける。これには、〈『神である主を試みてはならない。』とも書いてある〉と答えた。そして最後、高い山の上からこの世のすべての国々の栄華を見せられ、〈もしひれ伏して私を拝むなら、これを全部あなたに差し上げましょう〉と誘惑されたときは、こう言い放ちます。〈引き下がれ、サタン。『あなたの神である主を拝み、主にだけ仕えよ。』と書いてある〉と。この三番目の誘惑は、私たち現代日本人がたっぷりと持っている金銭欲や権力欲を刺激するものです。マタイ福音書では、最初のシーンで悪魔を〈試みる者〉と記していることにも注目してください。

悪魔のささやきについて考えるとき、私はいつも、この荒れ野の誘惑を思い出します。

実際にイエスに対してそういう誘惑がなされたのかどうかは知らないけれど、この三つは当時、聖書を書いた人々の心に深く刻まれていた何かの出来事の比喩なのではないでしょうか。イエスの時代も、そして今も、悪魔が人間にささやきかけるときは私たちの欲望を必ず刺激してくる。そのことを、実にうまく表現した比喩だと思います。

## 聖書や文学に描かれた悪魔の姿

ところで、荒れ野でイエスを誘惑した悪魔は、どんな姿をしていたと思いますか。あのエピソードは、マタイ、マルコ、ルカ、三つの福音書に載っていますが、実は悪魔の姿かたちについてはまったく書かれていないんです。私たちが知っている一番有名な悪魔の姿といえば、コウモリの翼とヤギの脚を持ち、角がはえ、口が耳元まで裂け、髪が炎のように燃えあがっている……といったものだけれど、いかにも悪の化身といったあのたぐいの悪魔像は後世の神学者や画家やオカルティストたちが考え出したもの。『旧約聖書』にも『新約聖書』にも、いっさい登場しません。

では、聖書のなかで悪魔はどのように描かれているのか。まず『旧約聖書』を見てみましょう。『旧約聖書』には悪魔という名前自体が出てこないのですが、悪魔らしきもの、『新約聖書』で悪魔とみなされている存在は何度か登場します。なんととっても有名なのは、創世記でエバに語りかけてくる蛇。この蛇にそそのかされ、神が食べることを禁じた＜善悪の知識の木＞の実を食べてしまったために、アダムとエバはエデンの園を追放されてしまうわけですが、ただ、ここでも蛇と書いてあるだけで、どんな蛇かは描かれていない。

先ほど紹介したヨブ記などに出てくるサタンについても、姿に関する記述はありません。サタンというのは、もともとはヘブライ語で「妨げる者」「敵対者」を意味する言葉で、悪魔という意味合いは含まれていなかったのだそうです。『旧約聖書』のなかでは、神に面と向かって敵対することはなく、あくまでも神に従う天使の一人。ヨブに災厄をもたらしたときのように、基本的には神の許しや命令を受けて人間を妨げたり害をなしたりする存在でした。サムエル記でサウル王に取り憑いて苦しめる悪霊も、＜神からの、わざわいの霊＞と記されているので、神が遣わしたものだと思われる。サタン的なものとして、ほかにも＜汚れの霊＞＜偽りを言う霊＞などが出てきますが、霊ですからやはり姿は描かれていません。

それが『新約聖書』になると、サタンは神に真っ向から敵対する者という扱いになる。ヨハネ黙示録にはこう記されています。

＜天に戦いが起こって、ミカエルと彼の使いたちは、竜と戦った。それで、竜とその使いたちは応戦したが、勝つことができず、天にはもはや彼らのいる場所がなくなった。こうして、この巨大な竜、すなわち、悪魔とか、サタンとか呼ばれて、全世界を惑わす、あの古い蛇は投げ落とされた。彼は地上に投げ落とされ、彼の使いどもも彼とともに投げ落とされた＞

大天使ミカエルと戦った竜は、東洋の神話や伝説に登場する聖なる存在であるスラリとした姿の龍とも、悪と破壊の象徴とされるズングリした西洋のドラゴンとも異なります。七つの頭と十本の角を持つ巨大な赤い竜で、その尾で＜天の星の三分の一を引き寄せる＞と書かれている。この黙示録の記述と、ペテロの手紙の＜罪を犯した御使いたち＞という表現などから、のちに墮天使という概念が作られました。天使のなかでも最も美しく気品のあった大天使長、「明けの明星」を意味する名を持つルシファーが、天使たちの三分の一とともに神へのクーデターを起こす。原因は、奢りからだとも、神が人間を寵愛したことへの嫉妬からだとも言われています。で、戦いに破れ大いなる深淵へと落とされたルシファーはサタンと呼ばれるようになり、ともに追放された天使たちのなれの果てである悪魔軍団を率いる君主となった……というのが、聖書以降に神学者たちが考え、ミルトンの『失樂園』によって一般的になった墮天使と悪魔についてのストーリーです。サタンとルシファーは別ものとする説や、他の著名な悪魔を含めてサタンを複数とする説もありますが。

ちなみにサタンに仕える悪魔には、巨大な蠅の姿で描かれることの多いベルゼブル、猫とヒキガエルと人間の三つの顔を持ち下半身が蜘蛛というバアル、七つの蛇の頭と十四個の顔と十二枚の翼を持つアザゼルなどがいます。そうそう、『旧約聖書』のヨブ記に触発されてゲーテが書いた『ファウスト』の悪魔メフィストフェレスも墮天使の一人ということになっている。ファウストを墮落させられるかどうか神と賭けをしたメフィストは、まず、炎のなかに、恐ろしい霊——具体的には描かれていませんが——として、次に黒いむく犬として現れ、やがて学生<sup>ヒューム</sup>の姿となってファウストとともに遍歴します。一般的に考えられている本来の姿は、直立したドラゴンかグリフオンのよう。コウモリの翼とロバの蹄<sup>ひすめ</sup>と大きなくちばしを持ち、全身が黒い毛でおおわれているのだそうです。

ただ、ベルゼブルにしてもバアルにしても、サタンの<sup>きか</sup>麾下とされる悪魔たちの多くは、ユダヤ教やキリスト教が広がっていく過程において、それまで信仰されていた他の宗教の神々が悪魔化されたものだとか。先に述べた仏教の第六天魔王も、ヒンドゥー教のシヴァ神を悪魔として取り入れたと言われています。私たち人間は、なんの宗教でもそういうことをやっているんでしょね。

だいぶ話がとんでしまいました。聖書の悪魔の話に戻しましょう。『新約聖書』でも、はっきりと悪魔の姿が描かれているのは、ヨハネの黙示録の竜の記述ぐらいで、あとは単に悪魔とかサタンとか悪霊などと書いてある。でも考えてみると、いかにも悪魔といった恐ろしい姿をして現れたら、人間がいくら愚かな存在といえど警戒するでしょうから、人を誘惑して墮落させ神に背かせるという目的が果たせなくなってしまいます。そういう意味では、姿を持たない霊的な存在だからこそ、悪魔は恐ろしいとも言える。

文学の世界でも実にさまざまな悪魔が描かれていますが、読んでいて本当にゾッとさせられるのはおぞましい姿の悪魔ではないようです。たとえば、マーク・トウェインの『不思議な少年』。十六世紀オーストリアの小さな村に、サタンと名のる美少年が現れます。そして、その村に住む三人の少年たちの前で、自分は天使だから悪いことをする素質がないのだなどと言いながら、非常に残酷な行為をして見せる。さらに、人間というものがいかに愚かで残酷になりうる生きものかということ<sup>しんらつ</sup>を辛辣な人間批判によっても思い知らせていくのです。トウェインが晩年に書いたこの小説は、『トム・ソーヤーの冒険』や『ハックルベリ・フィンの冒険』と同じ著者によるとは思えないほどペシミスティックだけれど、実におもしろい。

ドストエフスキーの『カラマーゾフの兄弟』には、次男のイワンが悪魔と対話する場面があります。まず、ストーリーをざっと紹介しておきましょう。兄弟たちの父親であるフョードル・カラマーゾフが何者かに殺され、日ごろから父親を殺したいと明言していた長男のドミートリイが逮捕されます。やがて殺したのは、カラマーゾフ家の給仕でイワンを尊敬していたスメルジャコフだと、読者には明らかになる。と同時に、イワンを脅すスメルジャコフの言葉によって驚くべき真実が明かされていきます。実は、彼は単なる実行犯にすぎず、真犯人はイワン、いやイワンの意識下の願望でした。前々から父を軽蔑し憎み、その死を密かに渴望していたイワンが、スメルジャコフに殺す動機と機会を与えた。

兄の判決の日が迫るにつれ、冷徹な大秀才で無神論者だったイワンは次第に心身を病んでいきます。そして、ある日、自分の部屋のソファに、いったいどこから入ってきたのやら一人の見知らぬジェントルマンが座っていることに気づく。病気の見える幻覚と幻聴なのだと頭では理解しつつも、紳士の姿をした悪魔と対話し、皮肉を言い合い、怒り、叫ぶ。文豪ドストエフスキーの総決算ともいえる小説のなかでも、あの場面は非常に興味深く、どこかコミカルでいながら恐ろしいものがあります。イワンが悪魔にぶつける〈お前は俺の幻覚だ。お前は俺自身の、といっても俺のある一面だけの化身なんだ……俺の思想や感情のうちの、もっとも醜い愚かなものの化身だよ〉という言葉どおり、あの悪魔はイワンの自画像、抑圧してきた自己なのでしょう。

## 人の心の奥底に潜むもの

悪魔は果たして存在するのか——かつてイエズス会の神父さんに投げかけた質問は、私自身が数十年にわたって考え続けた疑問でもあります。刑務所や拘置所で出会った犯罪者や病院で診療してきた患者さんたちと向き合い、同時に自分自身の内面を覗きこみながら、そしてまた聖書や文学に描かれた悪魔というものも手がかりにしながら、つらつらと考え私なりに出した結論は、やはり悪魔はいるだろうということです。どんな姿をしているのか、肉体などなく霊的な存在なのか、そういったことはわからないし、これからもわかりえないでしょう。しかし、これだけは断言できます。少なくとも私たち人間の心のなかには、悪魔的なものが確固として存在している、と。

あなたのなかにも悪魔が棲んでいるんですよ。などと言うと叱られそうだけど、ちょっと考えてみてください。派手に人が殺されるアクション映画や時代劇を楽しんで見てはいませんか。もっとらくをしてお金を儲けたいと思ったことはないですか。異性にもてたい、人から一目置かれる人間になりたいと願ったことは？ あんなやつ車にでもひかれちまえばいいのにと、心の中で毒づいたことは？ おしゃべりしながら道いっばいに広がってトロトロ歩いている若者たちを突き飛ばしたくなることは？ 仕事も家庭も何もかも放り出して、南の島かどこかで遊んで暮らしたいと思ったことは？

犯罪というのは、人殺しにしろ詐欺にしろレイプにしろ強盗にしろ、そういった普通の人間が持っている欲望の実現なのだと思います。私たちは、人を殺す映画やゲームを殺人者の心になって楽しむことができる。憎しみや嘘、怠惰や逃避や破壊への欲望が、胸のなかで大きく膨らむこともある。もちろん、大部分の人は映画や空想の世界で遊ぶだけで、現実の行為には走りません。そして善人として一生を終える。それは、道徳や良心や理性といった、ちょっとした歯止めが働いて犯罪者になることを防いでくれているからなのです。

皆さん、その歯止めというのがスチールか何か頑丈なものでできていると思っていらっしゃるようだけれど、たくさんの犯罪者を見てきた私からすると、波打ち際に作られた砂の城さながらに脆い。ここまでは波が届かないから大丈夫と思っていても、すこし強い風が吹けば高波に洗われて、きれいさっぱり消えうせてしまう。その程度のものなんです。

悪魔のささやきという名の強風が吹けば、強固だと信じていた歯止めは一瞬のうちに崩れ去ってしまう。そして、それまで心と肉体の奥に抑えつけていた、あるいは自分自身ですら気づいていなかったものが外側にあふれ出してくる。その結果として、第一章で紹介したゼロ番囚たちは、自分のおかしてしまった行為に自身も驚き、戸惑い、おののきながら、塀の向こう側に落ちていったわけです。

東京拘置所で診療した死刑囚のなかに、五〇年代初頭に世間を戦慄させた「おせんころがし事件」の栗田源蔵という男がいました。十代のうちから傷害や殺人未遂、窃盗を重ねて出所後、結婚の約束をした二人の女性に二股をかけていたのがばれたため二人とも殺してしまいます。うまく逃げおおせた四年後、盗みに入った家の女性を強姦し殺害。さらに、駅で知り合った子連れの女性を目的地まで送ってあげるとだまし、おせんころがしと呼ばれる断崖から七歳の少年を投げ落としたのです。母親は強姦のうえ殺害し、二歳の幼女まで崖下へと放り投げた。逮捕されるまでのあいだに、計八人を手に掛けた大量殺人者です。

残虐をきわめた犯罪を重ねながら、栗田自身はそれを悪事として自覚している様子はありませんでした。むしろ、自分のことを超絶した犯罪者として誇っており、「女の首を絞めて相手が死にかかったときが一番気持ちいい」「女が死んだ直後、まだ身体が温かいときに、おれの性欲は最高になるんだ」などと得々として笑いながら話すのです。それでいて死刑が確定してからも、再審申立、抗告申立、即時抗告を繰り返し、しまいに盗みはしたが人は一人も殺していないなどと冤罪を主張しはじめた。

あの栗田というゼロ番囚は、情緒欠除性の反社会性人格障害だったと思います。知的には問題がないのですが、他者に対する思いやりや同情心が生まれつき欠落している。その一

方で、自身の利益や快楽に対する執着が強く、衝動的で攻撃的。ゆえに良心の呵責を感じることなく、冷静に凶悪犯罪を重ねることができる。「池田小事件」の宅間守も、死刑確定後の態度は対照的でしたが、栗田と同じタイプだったのではないのでしょうか。

こういう情緒が欠落した人間がなぜ生まれるのかは、まだわかっていません。両親の性格傾向や育った環境が関係している場合もあるけれど、無関係なことも少なくない。どんな時代、どんな社会においても、ごく小数ではありますが必ず存在します。しかも、たいていは生まれつきのものであって、防ぎようがないのです。

存在そのものが悪魔のように思える彼らを、私たちは自分とは異質な人としてさげすみ、拒絶してしまいがちです。しかし、その悪魔性をもうちょっとマイルドにしたものが、誰の心のなかにも潜んでいる。そういう意味では、きわめて特殊に見える反社会性人格障害も含め、すべての犯罪者の心をじっくりと見据えていく必要がある。人間という存在を知り、悪魔のささやきにあらがう方法を考えていくための宝物なのですから。

## 生命維持のためでなく、ただ殺すために殺せる動物

戦争と殺人の世紀だった二十世紀が終わり、平和が訪れるのかと思えば、二十一世紀はアメリカの同時多発テロで幕を開けました。報復のためのアフガニスタン空爆、石油利権もからんでいと言われるイラク攻撃、さらにその報復としての欧米諸国へのテロ、自衛隊をイラクに派遣した日本もターゲットにされた誘拐と見せしめのための殺害……。そんな世界情勢に比例するかのように、平和なはずの日本でも凶悪な殺人や暴力事件が続発しています。

人はなぜ人を殺すか、どうすれば殺人と暴力のない世界がやってくるか。この切実で大きな問いに関して、社会学、歴史学、人類学、心理学、動物行動学、文学、哲学、宗教……さまざまな立場からさまざまな研究がなされ、数多くの本が書かれてきました。しかし、多くの人が納得し、解決へとつながる答えは、いまだ見つかってはいません。そして、答えが見つからないということ自体が、人間というものの内側に悪が存在していることの証明と言えるような気がするのです。

一つ、興味深い本をご紹介します。アルバート・アインシュタインとジグムント・フロイト、二十世紀を代表する二大知性が交わした往復書簡をまとめたもので、タイトルはずばり『ヒトはなぜ戦争をするのか？』<sup>(1)</sup>。一九三二年、五十三歳だったアインシュタインが、<人間にとって最も大事だと思われる問題を取りあげ、一番意見を交換したい相手と書簡を交わしてください>と国際連盟から依頼されて選んだのが、当時七十六歳だったフロイトであり、このテーマだったそうです。

<人間の心を特定の方向に導き、憎悪と破壊という心の病に冒されないようにすることはできるのか？>という物理学者の問いかけに、精神分析の創始者は、<人間から攻撃的な性質を取り除くなど、できそうにもない！>と明言しています。フロイトの理論にはいくつかの変遷があるけれど、初期の性欲論としてのサディズムの考察、中期の「自我の保存本能」としての攻撃性、また後期の「死の本能」論に至るまで、彼は一貫して、人間には生まれつき攻撃性がそなわっているという立場をとっていました。

二人がそんな書簡を交わした年の七月、ドイツではナチ党が総選挙で第一党に躍り出、翌三三年にはヒトラーが首相に就任。独裁政権の道を歩んでいきます。同じ年、アインシュタインはナチス・ドイツから逃れてアメリカへ、フロイトもその五年後にはウィーンからロンドンへと亡命しました。二人ともユダヤ系ということで弾圧、迫害され、人間の攻撃性を身をもって味わわされることになったわけです。

フロイトが六十代になって到達した死の本能論とは、簡単に言うところのことです。人間の根本的な生命エネルギーには、生きること、楽しむこと、形あるものを作り出し成長させることを望む「生の本能(エロス)」と、生まれる前の状態である無に還ろうとし、ときに不快や苦痛をも求める「死の本能(タナトス)」の二つがある。タナトスは攻撃性としても現れ、それ

が内側に向けば自己嫌悪や罪悪感といった感情が生じ、自殺衝動となるが、外の対象に向けられると憎悪や殺意などの感情を生み、暴力や殺人といった行動につながる。

フロイトとは出発点が違いますが、動物行動学者のコンラート・ローレンツも、攻撃性は人間の本能であるという学説で有名です。七〇年代の日本で、人間性の悪を考えるとときの基本文献であるかのごとく読まれた『攻撃』<sup>(2)</sup>によれば、人間はネズミ同様、同族のあいだでは社会的に平和に暮らそうとするけれど、それ以外の仲間に対しては攻撃的に振る舞う。文明という不自然な環境においては、生まれながら持っている攻撃性がますます高まって、仲間同士の殺し合いにまで至るといいます。

ローレンツの学説は数種類の動物の行動から安易に人間の行動を類推していると批判したエーリッヒ・フロムの『破壊』<sup>(3)</sup>は、さらに衝撃的なものでした。古生物学から人類学、神経生理学から精神分析学まで、人間についての知見を幅広く比較・研究したうえで、彼はこう力説しています。人間の残虐性と破壊性は、ほかの動物とは異なる。なぜなら、食べるため、防衛のために攻撃するだけでなく、殺すために殺すという殺し屋になれるから——と。

攻撃性は人間の本能という説は誤りで、情愛を求める気持ちのすり替えであるとか、欲求不満が原因だといった批判も多々あります。それらに納得する部分はあるけれど、私としては残念ながらフロムに同意せざるをえません。人の心には残虐性や殺人への願望が隠れている。さらに言えば、低きに流れる怠惰さや依存心も、たっぷりと持ち合わせている。

ただ、だから人間の本性は悪なのだと言うつもりはありません。性悪説、性善説といった単純な二元論では割りきれないのが、私たち人間という存在です。悪魔そのもののように思える人間だって、天使にささやかれたかのようにいいことをすることもある。逆に、心優しく正直な善き人間だから、絶対に悪をおかさないということはありません。心の奥底に棲まわしている悪がひょっこり表に現れれば、誰でも簡単に犯罪者となってしまうのです。善と悪が出たり入ったりする——いや正確に言えば、悪魔や天使のささやきのようなものによって内なる悪しきものや善きものが呼び覚まされる。そういう存在が人間なのだと思います。

## 悪魔のささやきの特徴

### ささやきは「気」に作用する

「はじめに」で、悪魔にささやかれやすい精神状態について述べたのを覚えていらっしゃるでしょうか。犯罪者や自殺未遂者に、殺人なら殺人という行為に向けて走り出した瞬間、自殺を企てた瞬間について聞いてみたところ、意識的な行動ではなく、「ついフラフラッと」「気がついたら動いていた」「よく覚えていない」などと口にする人が多かった。そう、悪魔のささやきの第一の特徴は、あいまいでぼんやりした心に働きかけてくるということなのです。

そういう心の状態をなんと呼んだらいいのだろうと考えたんですが、非常にふわふわとした定まらない精神状態なものだから、意識とか心理とか意志とか思想とか理論といった言葉では表現できない。で、いろいろ探しているうちにたどりついたのが、「気」という言葉でした。たとえば、「あなたを殺そう」というのは意志だけれど、「あなたを殺そうという気があるよ」と言ったら、実際に殺すかどうかわからない。なんだかあいまいな、ふにゃふにゃした感じになりますよね。そういうあいまいな精神状態、微妙な心の動きを、日本人は気という言葉で動詞と結びつけて使うことによって表現してきたのではないのでしょうか。

気が合う、気に入る、気がいい、気がもめる、気が置けない、気が引ける、気が滅入る、気が休まる、気に病む、気がはやる、気が散る……アトランダムにいくつか拾ってみただけでも、日本語の「気」は、ほとんどが他者との関係において使っている言葉だと気づかされます。しかし、気という漢字自体は、米を蒸すときの蒸気から発想し生まれたもの。もともとが威勢のいいイメージの字だけに、中国から伝わった熟語を見てみると、勢いや動き、強さを感じ

じさせるものが多いんです。氣迫、氣宇、鋭氣、熱氣、元氣、氣力、陽氣、勇氣、殺氣、氣概……日本固有の使い方とは、だいぶ違うと思いませんか。

こうして考えていくと、日本人の基礎にある心の動きは気なのかもしれない、という「気」がそれこそしてきます。人を気にする。知り合いに会えば氣遣いをする。何かが気になってきちんとしたい、清潔にしたいと思う。そんな「気の国民」なんじゃないかと。

では、気の国民である日本人は何を信じているかということ、そのほとんどは神の存在を、キリスト教の神に限らず神道の神々もほうも信じていません。それでは仏を信じているかといえば、そうでもない。かといって、まったくの無宗教というわけでもない。正月は神社に初詣に行き、クリスマスにはツリーを飾りケーキを食べる。家のなかに仏壇や神棚があり、毎朝お茶をあげるのが習慣だという家庭も少なくない。結婚式はキリスト教か神式か、そのミックスで、葬式や法事は仏式。諸葛孔明が発案した——これは後世のこじつけらしいですが——六曜が今でも手帳に印刷されており、冠婚葬祭のときだけ仏滅だの友引だのと気にする。宗教というものに対する姿勢も、やはりそのときの気分によってあいまいなようです。

この「気」という言葉に象徴されるあいまいさは、第二章で考察した日本の気候や歴史によって培われたものなのでしょう。それ自体は必ずしも悪いことではないのだけれど、先ほど述べたように、悪魔のささやきは、こういうあいまいでぼんやりした状態の人間にこそ威力を発揮しやすい。言い換えるなら、「気」に作用するのです。

「コギト・エルゴ・スム(Cogito, ergo sum 我思う、ゆえに我あり)」というデカルトの有名な言葉があります。コギトは思考する我、すでにはっきりと存在感を持った意志です。「考える」という重い言葉を使って、デカルトは考える主体である自分の存在を確信し、自己を基準に世界と関わろうとした。それに対してハイデガーは、「das In-der-Welt-sein 世界内存在」というものを自分の哲学の基本に置きました。世界の内にいる、という在り方をしているのが人間である。自分というの自分だけで存在しているのではなく、自分の周りにあるすべてのものをひっくるめて自分なのだと考え、世界内存在という言葉で表現したのです。それは言い換えれば、人間はコギトになる前から、常に世界の風にあたっているということでもある。しかし、ほとんどの人は、そのことを意識していない。

存在しているだけで世界の風にあたっている、常に世界と接しているということは、それだけ悪魔にささやかれる危険も大きいということです。私たちの周囲には常に、そのときどきの風潮や流行、人々の気分や街の雰囲気といった風が吹いている。今の日本で言うなら、拝金主義とか、すさんでいらついた気分の蔓延とか、未来への不安感といったところでしょうか。そういうものが人間の心の奥底に潜んでいる悪と共鳴し、ある瞬間に堰を切つてあふれ出し、その人自身や周囲を破滅へと押しやるような行動となって表れる——それが悪魔のささやきという現象なのだと思います。

『新約聖書』のヨハネ福音書に、〈風はその思いのままに吹き、あなたはその音を聞くが、それがどこから来てどこへ行くかを知らない〉という記述がある。これはイエスがユダヤ人の指導者ニコデモに、風にたとえて神の存在を証明しているシーンなのですが、悪魔のささやきも常に風のように私たちの周囲を舞っているんじゃないか。目には見えないけれど、人間に対する作用を見ると確実に存在していて、人間を悪の方向へ追いやろうとする。だから、ふわふわした状態の心は悪魔のささやきという強風に吹かれるまま、いとも簡単に思いがけない場所へと飛ばされてしまうのです。「風に草がなびくように民もなびく」という言葉がありますが、まさにそんな感じですね。

## 軽い気持ちから、取り返しのつかない結果が生じる

自分の周りの人や事物と関わり合って生きていかなければ、存在しえないのが人間です。どんな人であろうと悪魔のささやきから遠く離れて、安全圏で暮らすことはできません。人間は世界内存在であると説いたハイデガーでさえそうでした。『存在と時間』(4)を著し二十世

紀前半の哲学運動の旗手となった彼は、その六年後、ナチ党に入党。フライブルク大学の総長だったころ、ハイデガーが学生たちに向けた演説やナチ党の機関誌に寄せた文章を読むと、愛国精神やヒトラーへの賛美を高らかに語っていることに驚かされます。やがてナチズムの実態に気づいて総長を辞任しますが、数年間とはいえ高名な哲学者がナチスの台頭期に熱烈に支持したことは、ドイツ国民にとっても世界にとっても不幸でした。そして彼自身も、戦後、ナチス協力のかどでしばらく公職を追われることになるのです。

ハイデガーがナチスに入党した一九三三年は、アインシュタインがアメリカに亡命した年でもあります。それから六年後、アインシュタインは「私の人生のなかで最大の過ち」と後悔し続けることになる、あることを行うのです。あることとは、シラードという物理学者が起草したルーズベルト大統領宛の手紙にサインをしたこと。その手紙は、天然ウラン原子炉開発の資金提供を願うと同時に、ドイツがウランを使った強力な新型兵器を開発する恐れがあると指摘したものでした。

アメリカ政府がイギリスと情報交換しながら、原子爆弾開発のためのマンハッタン計画を極秘裏にスタートさせたのは、二年後の一九四一年。アインシュタインが署名した手紙は原爆開発を直接的に勧めたものではなかったものの、きっかけの一つとなったことは間違いありません。それまでルーズベルトはあまり原爆のことを考えていなかったのに、急に熱心になって物理学者を総動員している。アインシュタイン自身、ヒトラーが連合軍より先に原爆の開発に成功したらたいへんなことになるという危機感から署名したと認めています。

原爆が完成に近づいたころ、ドイツが降伏。日本への原爆投下が検討されていると知り、かつて原爆開発をうながす手紙を書いたシラード博士らが、今度は無警告での原爆使用に反対する請願書を七十人近い科学者の署名を添えてルーズベルトに送ったそうです。しかし、その手紙を読む前にルーズベルトは病死し、開発された原子爆弾は次に大統領となったトルーマンの命令で広島と長崎に落とされました。投下後間もない段階で、広島では人口三十万のうちの四割、長崎では二十万の三割、総計十八万五千人が死傷。その後も死者は増え続け、三十万人と言われる人々が犠牲になった。放射能の被害は被爆した本人に限らず子供たちにもおおよび、いまだに後遺症で苦しむ人々が多数存在しているのはご承知のとおりです。

ハイデガーもアインシュタインも二十世紀を代表する思考の人ですが、ではハイデガーがナチスに入党すると決めたとき、アインシュタインが手紙に署名したときはどうだったのでしょうか。自分の専門である哲学的命題や理論物理学の問題に向き合うときのように、考えに考えぬいた末の行動だったかという、どうもそうではないのではないかという気がします。彼らもまた、そのときの感情や時代の空気に流されるようにして、自分の行為がもたらす結果についてはさほど思いをめぐらすことなく、その選択を行ったのではないか。

トルーマンの回顧録<sup>(5)</sup>で、彼が日本への原爆投下を決めた前後の様子を知ったときも同じことを感じたものです。

一九四五年七月十七日から八月二日にかけて、ベルリン郊外のポツダムで会議が行われました。トルーマンとチャーチルとスターリン、三大国の首脳が集まって、ドイツはもう降伏したし戦後処理はどうしようか、今度はどうやって日本を征服しようかという相談をしたわけです。会議の前日、ポツダムにトルーマンが着くと、スチムソン陸軍長官から電報が届く。ニューメキシコ州のアラモゴードで原爆爆発実験が成功したという知らせでした。

トルーマンは、開発に協力していたチャーチルに知らせ、二人で大喜びをする。当初、スターリンには秘密にしておいたんだけど、黙っているわけにもいかないと二十四日に話したところ、無表情に「それはおめでとう。その新兵器を日本に対して早く使いたまえ」というようなことを口にしたそうです。スターリンという人は、ものすごく関心のあることについては無表情になるらしい。実は、このときすでにソ連も原子爆弾を作ろうとしていたんですから。

当時アメリカは、九州に上陸する作戦を練っていましたが、急遽<sup>きゅうきょ</sup>それを変更し、原子爆弾

を落とすことにします。そして原爆投下と同時に、ソ連軍が満州に進攻することを決めた。だから八月六日、原爆が広島の上空で爆発したあと、モスクワ時間八月九日午前零時にソ連軍は怒涛のように満州に攻め入ることができたわけです。トルーマンが、ほとんど戦闘能力を失っていた日本への原爆投下命令を出したのは、ポツダム会議中の七月二十五日のことでした。

トルーマンもチャーチルもスターリンも、原子爆弾というものがどのような災害を人類にもたらすかということについて、ある程度の知識は持っていたでしょう。しかし、それがあれほど非人道的なもの、歴大な数の人間を一度に殺せる大量破壊兵器であるだけでなく、何十年も続く後遺症の苦しみをもたらす人類史上最も残虐な爆弾だという認識はなかった。トルーマンの回顧録を読むと、驚くほどあっさりと、なんのためらいもなく、いやむしろ誇らしげに投下の決定がなされたことがわかります。

原爆投下を決めた背景として、憶測も含め、いろいろなことが言われています。民間人を大量に殺すことで決定的なダメージを与え、戦意を喪失させて日本が降伏勧告を受け入れやすい状況を作り、戦争の早期解決を図った。日本本土での戦闘によるアメリカ軍の損失を最小限にとどめたかった。二年半の歳月と二十五億ドルの費用をかけて作った最新兵器を、実戦で使う貴重な機会を逃したくなかった。戦後の覇権争いでソ連に対して優位に立ちたいという目論見があった。パールハーバーの恨みを返し、ジャップを痛い目に遭わせてやりたかった。東洋人に対する人種的偏見があった。決断力のある男らしい大統領であることを国民にアピールしたかった……。何が正解かはわかりません。おそらく、いくつもの理由が重なっているのですが、私はやはりそこに悪魔のささやきという要因もプラスしたくなるのです。あのときトルーマンの心に、そして彼の決定をあと押ししたチャーチルとスターリンの心にあったさまざまな思いに、悪魔が油を注ぎ火をつけてGOサインを出させたのではないか。

医学生時代、原爆症で死んだ七歳の少年の前頭葉を見たことがあります。当時、私は脳組織の研究のため東大の脳研究室に出入りしていたのですが、ある日、恩師から一枚のガラス・スライドを手渡されたのです。脳はそのままでは検鏡できないので、ガラス・スライドに薄切りの標本として定着させ、目に見えるよう色づけしなければなりません。いくつかある細胞の染色方法のなかでもニッスル法で色づけされた脳の神経細胞は、本来なら至上の天空の青、セレストブルーの衣をまとった天女が軽やかに飛翔しているように見えるはずなのに、その標本は違っていました。私が戦後目にした焼け跡の光景にそっくりだったのです。瓦礫と赤錆びてねじくれたトタンが散らばり、切れてもつれた電線が垂れ下がり、焼けこげた死体が累々と横たわっている……そんな焼け尽くされた荒れ地のような光景が、顕微鏡を覗く視線の下に私を嘲笑うかのごとく広がっていました。

「被爆後、一ヶ月半にして苦しんで崩れて死んでいった幼い子の脳がこれです」

驚く私に、先生は喉を詰まらせながら、脳の持ち主だった少年のことを語りはじめました。少年は八月六日、爆心地から約六百メートルのところのただけれど、川原の石の陰だったため皮膚に軽い火傷を負っただけで助かったそうです。家に戻ると両親も弟も死んでいたもので市内をうろついていたところ、収容所に保護され、すっかり元気になった……と思ったら、八月末になって歯がぐらぐらになって抜けてきた。九月に入ると頬が腫れてお化けみたいな顔になり、胸が苦しくなり、膿の混じった鼻血が大量に流れ出した。九月半ばからは三十九度を超える高熱が続き、喉の激痛を訴え、やがて意識を喪失。体中の体液が溶けて流れてしまったような猛烈な下痢の末、命も流れ出て、十九日に息を引きとったということでした。

「放射能が、脳、骨髄、血液、脾臓、リンパ結節など、未熟な子供ではとくに敏感な部分を徹底的に破壊したのです。これは病気なんて生やさしい現象じゃない。人類がいまだかつて行ったことのない残酷な殺人です」

その日、私は、広島と長崎の被爆者三十七人の放射能でおかされた脳細胞を見、それらの標本を精査して中枢神経系に対する原爆被害の実態を明らかにした論文をむさぼり読み、家に帰ると部屋にこもって「知らなかった、知らなかった」と叫び続けました。東京や名古屋で一面の焼け野原と焼死体を目の当たりにしてはいたけれど、原爆のすさまじさは大空襲の被害とさえくらべものにならなかった。かけ離れて大きく、異様で、残虐なのだということを、つくづく思い知らされたのです。そして、そんな体験があったからこそ、トルーマンの回顧録を読んだとき、あれだけの悲劇をもたらした原爆投下命令が、こんなにもあっけなく出されたものだったのだと、愕然としたのだと思います。

ハイデガーやアインシュタイン、そしてトルーマンの例などからもうかがえる悪魔のささやきの第二の特徴。それは、自殺や殺人や大量殺戮といった重大な結果につながるにもかかわらず、心の動きとしては実に軽やかで、深い思索や実験や反省に支えられていないということです。フランス大統領だったドゴールは戦後、トルーマンとチャーチルとスターリンが日本への原爆投下を考えたのは非常に残酷なことだと批判しましたが、彼はポツダム会議に呼ばれなかった。もし参加していたら、同じことを会議の場で主張し反対できたでしょうか。ドゴールだって、その後熱心に原爆開発を進めているのです。

トルーマンは原爆を投下した直後、有名な演説をしています。我が国は世界で初めて原子爆弾を使用したと誇る勝利宣言のような演説でした。それを聞いて、日本を攻めるため太平洋の島々にいた米軍の兵士たちをはじめ、アメリカ人みんなが総立ちになって拍手をした。

それから三十年の歳月が流れた一九七〇年代、デイトンのエアフォース・ミュージアムを訪れたことがあります。長崎に原爆を落とし「ボックスカー」というあだ名のついたB29爆撃機が展示されているので見ていたら、女性教師に連れられたアメリカの小学生の集団がやってきた。子供たちは、原爆を作ったのは世界的な偉業であり科学と民主主義の勝利だといったことが書かれたボードを読むと、原爆の模型に触り、そなえつけのビデオに二十五セントを入れて見はじめました。そしてキノコ雲が上がった瞬間、いっせいにワアッと歓声を挙げて拍手したんです。

私は子供たちの喜びの声と引率の先生の得意げな説明を聞きながら、悪魔に動かされているアメリカ人の様子を悲しく見ていました。長崎に落とされた「ファットマン(ふとっちょ)」という原爆の原寸大模型、隣に「リトル・ボーイ(ちびっこ)」という広島に落とされた原爆の模型もありました。ともに高さ三メートルほどの爆弾ですが、B29のそばでは小さく見えた。この小さな爆弾が何十万人もの人間を殺傷した悪魔の大量殺戮兵器でした。

一九九五年には、スミソニアン博物館で第二次世界大戦終結五十周年を記念する特設展が企画されました。アメリカではほとんど知られていないキノコ雲の下で起った悲惨な現実にはスポットをあてようと、被爆者の遺品なども展示しようとしたところ反対運動が起こり、当初の企画は頓挫。広島に原爆を落とした「エノラ・ゲイ」というB29の復元展示だけが行われたのです。

戦後、日本は必死になって原爆の残虐さを世界に発信し続けてきたわけだけれど、アメリカ人のほとんどがいまだに原爆投下は正しかったと考え、国家の偉業として誇り、顕彰しています。その認識を変えざるをえなくなることを恐れる無意識の働きか、原爆の悲惨さに目をつぶり続け、知ろうとしない。トルーマンにささやきかけた悪しきものが、今もアメリカ人をそういう方向へと動かしているような気がしてなりません。と同時に、もし日本が先に原爆を作りアメリカに落としていたら、私たち日本人も同じような形で悪魔のささやきに身を委ね続けていたのかもしれないということも、胸に刻んでおかなければと思うのです。

## 自分は大丈夫と思っている人ほど、激しく動かされる

では、悪魔のささやきはどのように聞こえてくるものなのか——ささやかれたことのない人は、そんな疑問を持つでしょうね。結論から言うと、はっきりと声が聞こえたというケー

スはまれです。「悪魔がささやいたんです」と話していた犯罪者や自殺未遂者に、どういう声で、どこから聞こえたか、どんな内容だったかを尋ねると、

「いえ、何かを言ってるのがほんとに聞こえたわけじゃなく、そういう感じだったってことなんです。誰かに動かされたみたいに、気がついたらやっちゃってたんですよ」

「あのときは、頭のなかに声なき声みたいなものがわきあがってきて、それに背中を押されたように動いてました。だから、正確に言えばささやきが聞こえたんじゃないんだけど」

といった答えが返ってくる。ほとんどの人は、実際に耳でなんらかの声を聞いたわけではありません。犯罪に走る直前、あるいは自分の命を絶とうとする直前、何か得体のしれない強い力に背中を押されたように感じ、それを「悪魔にささやかれた」と表現していたのです。では、なぜ彼らは一様に、「ささやき」という言葉を使うのでしょうか。

また聖書の話で恐縮ですが、先ほど紹介したアダムとエバがエデンの園から追放される場面を思い出してください。あのシーンには、悪魔の化身である蛇の姿は描かれていないという話をしましたね。エバには蛇の姿は見えていません。蛇は、神が禁じた＜善悪の知識の木＞の実を食べてしまえ、そうすればあなたたちも神のようになれる、と声で誘いをかけるんです。蛇だけでなく、神の姿も描かれてはいない。やはりアダムとエバに聞こえてくるのは、禁忌を破ったことを怒り、悲しみ、罰を与えて追放する神の声だけです。

これは、私のような精神科医にとっては非常に興味深いエピソードでしてね。なぜなら、統合失調症の患者さんなどが自分は迫害されているという被害妄想を持つとき、その迫害者を見るのではなく、声を聞くんです。まずは幻聴からはじまる。耳と目の違いがここで明らかになります。耳にはすべての音が一緒に聞こえてくる。ところが目は自分の見たいものを見ています。耳には自由がなく目には自由があるのです。

本書の「はじめに」で紹介した精神医学者の西丸四方が、幻聴についての有名な論文を書いています。そのなかで彼は、次のように指摘しています。

＜患者はいつも何か幻聴しているのではなく、時おりふと聞えてくるのである。声が聞えると称するものの、何と聞えるのか、聞える通りに述べることはできない。…(中略)…悪口をいわれているという意味ははっきりわかっていながら、具体的な言葉は何だかわからないのである＞<sup>(6)</sup>

精神が緊張して何かに向っているときは聞こえず、ぼんやりしているときにだけ、ふと聞こえてくる。朝起きたばかりのときとか、昼間何も考えずにボーッとしているときとか、夜中に目が覚めて朦朧もうろうとしているときに襲ってくる。悪魔のささやきも、人間のぼんやりした心に働きかけてくるという話をしましたね。それと、よく似ていませんか。

さっき目と耳の違いを指摘しました。視覚というのは、見たいものを見るのであって、見たくなければ目をつぶればいい。しかし、聞こえてくるものは避けようがありません。ムンクの『叫び』という絵のように耳を両手でふさいでも、完全にシャットアウトするのは無理な話。なぜなら、幻聴は外から聞こえるのではなく、彼の心の、意識の裏側の声だからです。そういうふうに、視覚と聴覚とでは人間に対する働きかけの仕掛けが違ってきます。幻聴の場合は、本当に声や物音が存在し、それが耳から入ってくるわけではない。現実にはないものを脳が聞いてしまうのですから、それこそあらゆる方角から、ありとあらゆる声や物音が入ってきます。それは命令であったり、その人の悪口や噂話であったり、何かしようとしていることに対するネガティブなコメントだったり……実にさまざまです。ときには、自分が今考えていることが誰かの声として聞こえてきたりもする。

そんな統合失調症の被害妄想期に起こる幻聴について詳しい研究をしたのはフランスの精神医学者で、とくに十九世紀フランスのマニャンという精神科医が非常に適確に幻覚の出現の状況をつづっています。ちょっと長いですが、幻聴とはどういうものかがよくわかるので、さわりの部分を引用してみましよう。

最初は簡単なささやきである。ついで高声で語られた言葉となる。患者が外国語を知っている場合は外国語のこともある。この声は間断なく、昼夜を分かたず聞こえてくる。声はあらゆる方向から、床下から壁から、天井から煙突から聞こえてくる。声は患者を街の中でもどこでも追いかける。しかしふりかえってみても誰もいない。ある場合には、患者は自分の考えることが山びこのように反響してくるのに驚き「私が何か考えているそれが聞こえてくる。私の考えが奪われてしまう」という。(7)

私が診療にあたった患者さんたちも、だいたいこういう形で推移しています。もう一つ興味深いのは、幻聴に悩まされ被害的になっている患者さんと向かい合って会話をしているときに、「今はどうです？ 悪口が聞こえますか」と聞くと、聞こえないと答える。私という具体的な人間を見て、関係を持っているときは幻聴は起こらないんですね。「師長さんが私の悪口を言っている」としきりに訴える人も、看護師長本人が診察室にいるとき「今、師長さんの声、聞こえる？」と聞くと、聞こえなくなっている。被害妄想の原因となる相手が目の前にいるときも幻聴はない。幻聴というのは見えないところから聞こえてくるのであって、見えるところからは絶対に聞こえてこないものなんです。

幻聴は、統合失調症だけに現れる症状ではありません。健常者でも、パートナーと死別して悲嘆にくれているときなどに、一時的に幻聴が起こることはあります。またうつ病になると自分を責める気持ちが強まるのですが、頭のなかで「私は駄目な人間だ、生きていく価値がない」などと考えているうちに、そういう声が聞こえたような気になることもある。実は統合失調症の場合も、「声が聞こえるような気がする」仮性幻覚というところからはじまり、やがて「本当に聞こえる」と確信するようになるのです。

また、幻聴のようにはっきり聞こえるわけではないけれど、周囲の人に悪口を言われているんじゃないかと疑ってしまうことは誰にでもありますよね。たとえば職場でトラブルがあった翌日、自分がそばを通りかかったときに、みんなが急におしゃべりをやめたりしたらどう思いますか？ 人間は弱いものです。仕事や恋愛や家庭の悩みなどがきっかけで精神的に追いつめられていると、つい被害的になってしまう。相手の発言に「こう言ってたけど、ほんとはこう思ってるんじゃないか」と言外の意味を探したり、とくに意味のない言葉を音の似ている嘲笑語と勝手に聞き違えて傷ついたりもする。

耳をふさいでも聞こえてくる幻聴の怖さ、頭のなかにわき起こり声なき声となって人を苦しめる猜疑心や自責の念の恐ろしさを、私たちはみんな、漠然とではあるけれど知っています。それもあって犯罪者や自殺未遂者は、自分を破滅へと押し流した抗しがたい力を、悪魔のささやきと呼ぶのかもしれませんが。実際に耳に聞こえてくるのではなく、脳に直接語りかけられているかのように激しく人を揺さぶり、その人の人生に多大なる影響を与えるという点でも、幻聴と悪魔のささやきはよく似ている気がします。

このように、統合失調症をはじめとする精神の病を研究することは、人の心というものを知るうえでたいへん役立ってくれる。先ほど犯罪者の心は宝だと言いましたが、精神病の人の心もやはり宝物だと思います。彼らの示す症状は、もともと普通の人の心に潜む恐怖や望みや不安を拡大したものであって、健常者がまったく思いもつかぬような奇妙な精神状態などはありえない。奇妙と言うなら、私たちの見る夢のほうがよっぽどへんてこりんなのです。

統合失調症というのは文明社会の病気です。大勢の人間が集まって組織を作るようになってから増えてきたんです。そういう意味では非常に現代性があるって、患者さんたちを診ることにより、人間関係が複雑化した現代社会において私たちがどんなストレスを感じ、どのような経過で病んでいくかということを知ることができる。治療法も確立されてきています。

ところが、多くの人はいまだに精神病の患者さんたちを差別し、自分とは異質の存在と考えたがっています。何か事件が起こり、その人が精神科に通院していたなどというニュースが流れると、怖がってさらに偏見を増す。でも法務省の統計によれば、精神障害者による犯

罪は一般刑法犯の〇・六パーセントにすぎません。(8)

皮肉なことに、犯罪者や精神病質者に強い違和感を持つ人ほど悪魔のささやきにそそのかされやすく、その表れ方も激しいような気がします。犯罪の取り締まりを厳しくしろと言う政治家たちは、金権政治という犯罪を平気で行うし、中世のヨーロッパで精神障害者を魔女とみなした人たちは、彼らを焼き殺すという狂気におちいりました。悪魔は火に弱いから火刑にするしかない、焼けばその魂は救われる、これが最も慈悲深い行為である……そんなふうに考えて、ヨーロッパ中の女性の精神障害者を、次々と逮捕しては焼いていった。

魔女狩りが盛んに行われるようになったのは十五世紀。ルネサンス科学が花開いていた最中です。十八世紀に入ると極刑は減ったけれど、フランスのピネルという医者がフランス革命のちょっと前に、魔女と言われている人たちは実は精神病なのだと主張するまで牢獄に入れられていました。もちろん犠牲になったのは精神障害者だけではありません。自分たちは正しいと信じている人々が、キリスト教の異端者をはじめ、自分たちとは異質だと感じた人や気に入らない相手に魔女のレッテルを貼っていったのです。

人間は誰もが弱く、罪深く、心の奥底に悪しきものを棲まわせている。今のような混沌とした時代においてはなおさら、そのことに無自覚に暮らしていると、内なる悪魔に突き動かされ悪をなしてしまう危険性が高くなることを覚えておいてください。

## 注

- 1 『ヒトはなぜ戦争をするのか？——アインシュタインとフロイトの往復書簡』 浅見昇吾 訳 花風社 二〇〇二年三刷(二〇〇〇年)
- 2 『攻撃——悪の自然誌』 日高敏隆・久保和彦 訳 みすず書房 一九七〇年
- 3 『破壊——人間性の解剖』 作田啓一・佐野哲郎 訳 紀伊國屋書店 一九七五年
- 4 『存在と時間』 細谷貞雄 訳 ちくま学芸文庫 一九九四年
- 5 『トルーマン回顧録』 堀江芳孝 訳 恒文社 一九六六年
- 6 「精神神経学雑誌」第六十卷第十三号 一九五八年十二月より
- 7 『フランスの妄想研究』 小木貞孝 金剛出版 一九八五年(小木貞孝は加賀乙彦の本名)
- 8 法務省「平成 17 年版 犯罪白書のあらまし」による

「悪魔のささやき」 加賀乙彦著 集英社新書刊  
第三章 人間を嘲笑い破滅させる、ささやきの正体 [全文抜粋](#)

# 神の計画

ローマ人への手紙 8章 28節

2003.11.30 平岡広志

教会暦では、今日からアドベント、待降節に入ります。アドベントという言葉は「到来」という意味です。神様が私たちのために御子イエス・キリストをこの地上にお送り下さったクリスマスの到来を、祈り待ち望む時であります。暗いこの世界に神様の光が灯される主の救いの到来を待ち望む時であります。

アドベントというのは、本来、神さまご自身が自らを私たちに示して下さった出来事が、私たちのところに到来することを意味します。ですから、私たちがクリスマスに向かうのではありません。クリスマスが私たちのところに来てくださるのであります。クリスマスは何よりも主がすべてに先立って備えて下さった救いの出来事に基づいているからです。

神さまは天地創造の初めから、すべてに先立って私たちのために救いの業を始められ、私たちが主と共に生きるために主イエスご自身を私たちのもとに送って下さいました。そのことをパウロは、ローマ 11 : 36 で「すべてのことが、神から発し、神によって成り、神に至るからです」と言いました。

教会暦の中で、クリスマスに先立ってアドベントが備えられているということには、実は深い意味があります。クリスマスは、神さまが私たち人間のために備えてくださった「神の時」であります。アドベントは、その「神の時」を迎えるにあたって、私たちが、自分はいったい何者として、どこから来て、どこに向かっているのかを、信仰をもって深く考え、自らの心に問いかけるための「時」であります。私たちはこの現実の世界、目に見える世界に生きていますが、もし「神の時」というものを知らないならば、私たちは、自分がどこから来て、どこに向かっているのかを知ることはできません。そして、私たちの人生で神に向かい、神のうちにある時を知ることがなければ、真の意味で魂に安らぎを得ることもできません。エレミヤ書 6 : 16 にはこうあります。「主はこう仰せられる。四つ辻に立って見渡し、昔からの通り道、幸いの道はどこにあるかを尋ね、それを歩んで、あなたがたのいこいを見いだせ」。本当に私たちは、自分たちのいこいがどこにあるのか、魂の安らぎが、救いがどこにあるのかを、このアドベントのときに、人生の四つ辻に立って、もう一度見渡し、進むべき道、救いに至る道がどの道なのかを、祈りつつ尋ねなくてはなりません。

その意味で、アドベントはクリスマス前の一ヶ月だけではありません。私たちの全生涯がアドベントであります。なぜなら、私たちの全生涯は神から出て、神によって保たれ、神に向かっているからです。

私たちは神さまから召され、神さまのご計画に与る者としての役目を一人一人が担っています。私たちがこうしていま教会に集っているのも、洗礼を受けてクリスチャンになったのも、究極的には、全て神さまの召しによるものです。そして神さまはローマ 8 : 28(本日の聖書)にあるように、ご計画に従って召された人々を、神さまご自身がすべてのことを働かせて益としてくださいます。

神さまのご計画とは何でしょうか。それは、一言でいえば私たち人間の救いであります。エレミヤ 29 : 11 に有名な御言葉があります「わたしはあなたがたのために立てている計画をよく知っているからだ。それは、わざわざではなくて、平安を与える計画であり、あなたがたに将来と希望を与えるためのものだ」。

この箇所は、バビロンに捕囚されたユダヤの人々に語られた解放の預言の言葉です。クリスマスは、罪というバビロンに捕囚された私たち全ての人間を、そこから解放して下さる救いの到来の時であります。このように神さまは、私たちに平安と救いを与える計画を旧約の昔から今に至るまで備え、実行して下さった。その頂点がクリスマスの誕生から十字架、

復活へと至る主イエス・キリストの出来事でありました。

旧約の人々が救い主の誕生、クリスマスを待ち望んだように、私たちは今、復活の主が再びこの世界に来られて、神の国を完成される再臨のときを待ち望んでいます。その意味でも、さきほど申しましたように、私たちの人生はアドベントの時であります。私たちは今も神のご計画の中で生きているのです。

そしてまた、私たち一人一人がそのご計画に与る者として召され、用いられています。それは決して小さなことではありません。時として、一人の人間の召しが、後々に非常に大きな出来事となって、想像もできないような影響力を与えることになる。そのことによって、多くの人々の生命が救われ、一国の存亡の危機を救う。そのようなことが実際にあるのです。

今日は、その一例をお話したいと思います。

この話は私たちの富士川教会にもゆかりがあることです。名前を出して申しわけないのですが、足立さんの御一家に関わりのあることです。

以前、壮年会の小グループで、信仰の継承ということが話題になりました。その時に、足立兄がクリスチャンホームとしての自分の家系のルーツを話してくれました。足立家のクリスチャンホームとしての始まりは、足立さんの曾々祖父である足立元太郎という人だそうです。明治の初め、日本でキリスト教禁止が解かれたばかりの頃ですから、キリシタン時代を除けば、日本におけるクリスチャンの第一世代に属する方です。今の北海道大学の前身、クラーク博士で有名な札幌農学校の第2期生です。同級生に内村鑑三や、五千円札の肖像になっている新渡戸稲造がいます。足立元太郎氏も後に、母校の助教授を経て、当時の最重要産業であった生糸を生産し輸出するための横浜生糸検査所の所長という、今で言えば、農林水産省や経済産業省の局長クラスの要職に就かれた方でありました。

この2期生たちが、初めて札幌農学校に到着した夜、構内は静まり返っていたそうです。当然、何かしらの出迎えがあるだろうと思っていた2期生たちは当惑します。実は、その時、1期生たちは祈祷会の最中だったのです。信徒伝道者でもあったクラーク博士の影響で、第1期生たちは熱心なクリスチャンになっていました。そして、そこへ飛び込んだ第2期生たちは、今度は第1期生によって伝道されます。そして半分強制的に2期生たちはキリストを信じる者にさせられます。足立元太郎もその一人でした。2期生のうち何人が最後まで信仰を貫いたかは分かりませんが、少なくとも足立元太郎は生涯信仰を持ち続けました。足立兄の言葉によると、晩年「キリストじいさん」と周囲から呼ばれるほど熱心なクリスチャンだったようです。

私は足立兄からこの話を聞いて、興味がわきました。自分の身近なところに有名な内村鑑三や新渡戸稲造とゆかりのある人の子孫がいた、これはおもしろいということで、いろいろと調べてみました。そうしたら、更に興味深い事実が次々と出てきたのです。初めはただ驚くばかりでしたが、そのうちに、その背後に隠された神さまのご計画に触れて畏敬の念を持つようになりました。

明治37年4月、東京府立女子師範学校、現在の東京学芸大学に日本で最初の幼稚園ができました。園舎は師範学校付属小学校の一部屋を借りて開設されました。園長は小学校の校長先生が兼任。保母はただ一人、その年、女子師範を卒業したばかりの21歳の初々しい娘さん。名前は足立タカさん。足立元太郎の長女です。日本で最初の保母さんは足立兄の曾祖母である、このタカさんでした。

さて、翌年、明治38年4月、皇室に皇孫仮御殿というのができまして、そこで皇孫(明治天皇の孫、つまり後の昭和天皇のことです)を養育することになりました。それで、いったい誰がその養育係となるかということになったわけですが、当時、自分の孫を師範学校付属幼

稚園に通わせていた前文部大臣の菊池大麗(だいろく)という人が、タカさんを見込んで、殿下の養育係にはこの人しかいないと強く推薦し、足立タカさんが後の昭和天皇の養育係となったのです。

タカさんが、幼稚園でどのような教育をしたのか詳しいことは分かりませんが、菊池前文部大臣をして、この人しかいないと言わしめた以上、とても素晴らしい教育、保育をされたに違いありません。私は、その背後には父である足立元太郎から受け継いだキリスト教信仰があったのではないかと思います。

天皇は、昭和 53 年 12 月の須崎御用邸での記者会見の席上、次のように語っています。「タカは、本当に私の母親と同じように親しくしたのであります。彼女は北海道の出身であったので、松村松年(しょうねん)という北海道大学に奉職している昆虫学者と親しくしていて、私が調べて分からないときは、タカに相談すると、松村と文通して調べてもらい、親しく私を指導してくれたことを今なお忘れずにいます」

昭和天皇は学者天皇という別名でも知られているように、生物学では世界的な権威であり、多くの著書もありますが、生物学に興味を持ったその最初のきっかけは足立タカさんとの出会いではなかったでしょうか、と北海道師友会理事長の上田三三という方が言っています。

タカさんは昭和天皇が 4 歳から 15 歳まで養育係を務めました。幼少の頃は夜、添い寝をしてたくさんの物語を聞かせたり、歌を歌ってあげたそうです。おそらく、タカさんが幼い天皇に語ってあげた物語の中には、聖書の物語もたくさんあったのではないかと思います。歌の中には賛美歌もあったかも知れません。三つ子の魂 100 までもと言いますが、昭和天皇の人格形成の中で、幼い頃に枕辺で聞いた聖書の物語が知らず知らずのうちに大きな影響を与えていたことは容易に想像されます。そして、そのことが後の日本に非常に重要な意味を持つてくることになります。

タカさんは養育係を終えた後、天皇の侍従長であった鈴木貫太郎という人と結婚します。後に内閣総理大臣になった方です。この方も進歩的な思想の持ち主で、昭和天皇の篤い信頼を得ていた方ですが、昭和 11 年 2 月 26 日、有名な 2.26 事件が起こりますと、鈴木貫太郎もクーデターの暗殺対象となります。

夜半に陸軍の将校たちに自宅に踏み込まれ、何発もの銃弾をあびます。最後にとどめをさすというところで、タカさんが銃を持った将校の前に立ちはだかり、とどめをさすことは止めてくれと制します。これによって鈴木貫太郎は九死に一生を得るのですが、このことが後の日本の運命に大きく関係してくると、先ほどの上田氏は述べています。

昭和に入って、日本の政治は軍部が大きな力を持ってきます。やがて満州事変を経て、あの太平洋戦争に突入していくわけです。天皇は陸海軍の大元帥という立場でありますから、この戦争に対する全責任を負っていることは間違いのないことですが、今はそのことに触れると話がそれてしまいますので割愛します。私は天皇制については必ずしも賛成ではありませんが、ただ昭和天皇個人については、善良な方であったことを疑うことはできません。太平洋戦争のときも、天皇自身は戦争に反対のようであったことが文献を読むといろいろ出てきます。それはともかく、最初は破竹の勢いだった日本軍も次第に連合軍に押され、戦況は悪化の一途をたどります。そして昭和 20 年、ついに天皇はこれ以上戦争を続けることはできないと決意しますが、しかし敗戦のための責務を負う者が誰もいなかったわけです。そこで天皇は、すでに第一線を引退していた 79 歳の鈴木貫太郎を呼んで、その役目を依頼します。ひたすら辞退する鈴木に天皇は「もう頼みになるのはお前しかいない」と言うのです。その一言で鈴木は大役を引き受け、鈴木貫太郎内閣が誕生します。しかし事態は決して楽ではありませんでした。陸軍は最後まで徹底抗戦を主張して譲らず、海軍出身の鈴木貫太郎は生命の危険をおかしてまで、敗戦・和平の道にむけて努力を続けました。そしてようやく天皇を長とする御前会議の席で無条件降伏を受け入れることを決定することができたのです。

このことについて、上田氏は次のように述べています。「タカさんがいなかったら、2.26

事件で鈴木貫太郎は亡くなっていたでしょう。そうであれば、今日の日本はどんな姿になっていたでしょう。歴史の不思議を思わないではいられません」

話はもう少し続きます。

敗戦後、連合国最高司令官としてダグラス・マッカーサーが日本にやってきます。実質的な新たな日本の支配者です。天皇よりも立場は上です。敗戦後の日本をどうするのかは、ただこのマッカーサーの思いひとつにかかっていたと言っても過言ではありませんでした。昭和20年9月27日の朝、天皇はこのマッカーサーのもとに非公式で赴きました。当初、マッカーサーはこの訪問に対して冷淡でした。天皇の車がGHQに到着したときも、出迎えたのは二人の副官だけでした。そして実際、この訪問を機会に捕えられ、裁判にかけられて、処刑されるということも十分考えられる状況だったようです。

この日の会談の内容は公式には明らかになっていません。しかし、後の回顧録の中でマッカーサーが、会談はおおよそ次のようなものであったことを書いています。

二人が向かい合って座ったとき、天皇の指は震えていました。最初、マッカーサーは天皇が命乞いに来たのだと思っていました。しかし、その口から出た言葉はマッカーサーの予想を越えたものでした。

天皇は言いました。「私は、国民が戦争を遂行するにあたって、政治、軍事両面で行ったすべての決定と行動に対する全責任を負うものとして、私自身を、あなたの代表する諸国の採決に委ねるため、お訪ねした」。そして持っていた風呂敷包みを開けてマッカーサーに差し出したのです。**それは皇室の財産目録一式でした**。天皇は、自分はどうなってもよいから、この財産を使って国民が飢えることのないようにしてほしいと言ったのです。

この天皇の言葉と態度はマッカーサーの心を根底からゆさぶりました。そして天皇が帰るときには、自ら天皇を抱きかかえるようにして玄関先まで見送ったということです。

この会談によって、マッカーサーがどのように日本を統治するか、その政策の方向性が確定します。日本はアメリカの占領地になることを免れ、アメリカの援助のもとで国を復興する道を歩むことになります。

このマッカーサーと天皇の会談の様子は有名で、天皇を賛美する人たちはこぞって天皇がいかに人格者であるか、天皇のおかげでいかに国民が救われたのかを強調します。

私も、天皇制の是非は別として、昭和天皇がいかに善良な人格者であったかということには同意します。ただ、私が言いたいのは、その人格が形成される背後に何があったのか、ということに注目したいのです。一般には知られていませんし、もしかすると知っていても公にされないのかも知れませんが、**昭和天皇の人格形成の背後には、聖書を土台とし、キリスト教の博愛精神、自己犠牲の精神を幼少のときから教え込んだ足立タカさんの働きがあった**ということ、私はそのことに神さまの計画を強く感じるのであります。

ちなみに昭和天皇は、第一次教育使節団・団長として来日した、イリノイ大学総長ジョージ・ストダートを通して、敬虔なクリスチャンであったエリザベス・グレイ・バイニング夫人を皇太子、つまり今の天皇の家庭教師として招聘しました。おそらく自分が受けたキリスト教に基づく教育を自分の息子にも受けさせたいという思いがどこかにあったのだと思います。

このバイニング夫人はフレンド派、クエーカー教徒ともよばれる教派に属しています。余談になりますが、ジャーナリストの高橋紘(ひろし)氏は、このことについて次のように書いています。

「バイニング夫人の属する教団はフレンズ派とも呼ばれ、17世紀に英国で興った。制度や信条を持たず、抑圧されている人間を解放すること、非暴力主義で戦争を避け、平和な世界を創造するために自己を犠牲にすることをいわない人たちである。バイニングの来日は1946年10月15日だが、クエーカー派のこうした教えは、その直後に公布された「新憲法」の平和主義、戦争放棄とも合致している。クエーカーの精神が憲法に入ったと断言する根拠はないが、

GHQの要人や、彼らと交友のある日本人の中に、クエーカー派の人がおり、また理解を示す人が少なくなかった」

ある意味で、足立元太郎の信仰は娘のタカさんを通して昭和天皇に伝えられ、ひいては今の平和憲法の制定にまで影響を及ぼしているとも言えるのではないのでしょうか。

長くなりましたが、こうして振り返って見ると、神さまが足立元太郎という一人の青年の魂をとらえ、神さまのご計画の中で用いられたとき、それは単なる個人的な信仰にとどまらず、現在の私たち全てに大きな影響を与えていることがわかります。

歴史には「もしも」という言葉は当てはまらないと言われますが、もし、足立元太郎青年が札幌農学校で信仰を持たなかったら、足立タカさんも聖書やキリストのことは知らず、従って昭和天皇の人格形成も違ったものになったでしょうし、タカさんが鈴木貫太郎と結婚することもなかったかも知れない。そうなれば終戦の日時はもっと伸びて、その間に広島、長崎に次いで更に多くの都市に原爆が落とされ、犠牲者の数はもっと増していたかも知れない。そして日本はアメリカの植民地となり、今のような繁栄はなかったかも知れません。これを歴史の偶然として片付けることもできるでしょうが、私にはそのような偶然をはるかに越えた神さまの計画、摂理が脈々と流れていることを感じるのです。

今、アドベントのときを迎えるにあたって、私たちは今一度、この世界を造り、歴史を支配され、導いておられる神さまに目を向け、深い信頼をもって神さまの約束されたご計画と救いの成就を信じながらクリスマスを待ち望み、私たちの全生涯をアドベントの時として、祈りながら日々の生活に励んでいきたいと、そう願うものであります。

祈りましょう。

天の父なる御神様。

あなたによって私たちは、あなたの前に罪赦され、神の子とされ、そして、あなたの聖なるご計画に参加する者とされた光栄を感謝いたします。

私たちの世界は、あなたの前に罪に満ち、汚れに満ち、暗闇に満ちております。でも、主よ。あなたはそのような私たちの暗い現実の中に、御子イエス・キリストをお送り下さり、この世界に希望の光を灯してくださいました。そして、そのことが、決してあなたの気まぐれや思いつきで起こったことではなくて、旧約の昔からの、人間が罪に陥った時からの、ご計画であったことを覚えて深く感謝いたします。

どうぞ主よ。今、アドベントの時を迎えた私たち一人一人の魂に聖霊の力をもって働きかけ、一人一人に新たなる命と力を与え、そしてあなたの聖なるご計画に参加する自覚を与えてください。

一人一人の力は弱く見えますけれど、あなたのご計画の中で私たちの信仰が用いられるとき、まことに私たちの想像をはるかに越えた大きな働きがなされることを知らされました。どうぞ、足立元太郎さんのように、足立タカさんのように、私たちも用いてください。

クリスマスは単なるお祭りの日として待ち望むのではなく、まことに、あなたの永遠の救いのご計画が、私たちの世界に到来した日として、その深い意味を思いながら待ち望む者としてください。主イエス・キリストの御名によって祈ります。アーメン。

**註** 私(新村)は上記の一文をネットで拾い読みした時、ゾッとするような、「**悪魔の聖書**」の洗礼と『洗脳』の凄さに慄然としたのです。一般の善良なクリスチャンはきっと彼(平岡広志)と同じように、「聖書」の正体が「悪魔」の「詭弁書」であることに気付かず、終生そのイカサマの神(悪魔)の教えに従い、神(悪魔)の操り人形として終えるのだ。

**明治天皇～昭和天皇**一族がいかに「**悪魔の聖書**」の一族であるかは、彼らが「**ガーター騎士団**」の盟員であることで明らかであるが、その正体すら知らない彼(平岡広志)の『洗脳』が哀れでならないのである。

2012年9月16日 **日本義塾 新村紘宇二**

# 我が世界観

2013年9月18日 [新村紘宇二](#) (血統・縄文系日本人)

私は、1940年(昭和15年)2月1日生まれであるから、現在73歳(辰年)である。早生まれであるから昭和14年(兎年)の方々と同期生である。生まれは東京・新宿(旧東京市牛込区)である。

さて、この73年間で私は一体何を学んだのだろうか。私の世界観はどのように形成されたのであろうか。なぜ今、このことを再度載せねばならないかという、愈々「第三次世界大戦」が『勃発』するからである。そして、かねてよりの『預言』通り、人類は終末を迎えるのだ。

私の「脳」は、次の方々の『世界観』『人間観』によって強く影響され『洗脳』されている。

1. [ひろさちや](#) の「全情報」…私は、彼の仏教世界観が明快であり、わかりやすかった。
2. [松原久子](#) の「全情報」…私は、彼女の東西世界観が明快であり、わかりやすかった。
3. [田中宇](#) の「全情報」…私は、彼の情報收拾能力と客観的視野の広さに敬服している。
4. [加賀乙彦](#) の「全情報」…私は、彼の獄中者を含めた汎人間観の広さに敬服している。
5. [Wikipedia](#) の「全情報」…私は、これほど明快にして公正な大百科事典を知らない。
6. [新村紘宇二](#) 編「[フリーメイソンの深層](#)」・「[日本仏教史の深層](#)」・「[日本古代史の深層](#)」。

畢竟、再度、次の一文・四編を掲載するので、私の『預言』の『目』をしっかりと見てほしい。

## その1 3つの世界大戦



フリーメイソンの黒い教皇 アルバート・パイク (1809-1891)

何度も繰り返しますが、フリーメイソンは世界最大の秘密的結社ではありますが、何ら怪しいものではなく、あくまでも真理の追究、他の人々の尊厳と自由と権利を認め、自由・平等・博愛を実践してゆく団体です。

しかしながら、世界のトップクラスの政財界の多くの人々が入会している事実からも、世界の政治・経済にまったく影響を及ぼしているものではないと言え、それは非現実的であると思います。

弁護士、詩人、作家として活躍していた、多才な南部連邦の将軍、いくつかのインディアンと協定を結び、「KKK」の創始者でもある アルバート・パイク将軍は、1857年に秘密結社イルミナティの最高幹部(最高位 33 階級)にまで登り詰め、「黒い教皇」と呼ばれるようになった人物です。

西洋社会では、ラッキーナンバーとしての7(メソポタミアのシュメール文明の七曜から来ている)、トリニティの3(キリスト教の三位一体)、不吉な13の金曜日(アダムとイヴが禁断の果実に手を出したのが金曜日、人類最初の殺人アベルがカインに殺されたのが13日の金曜日、イエスキリストが磔刑が13日の金曜日)と、数字が何らかの意味を成しています。タロット占いで13番目のカードは、死神です。

フリーメーソン組織は33階級ありますが、33という数字を聞いて思い浮かべなければならぬのは、ユダヤ教のシンボリックな存在のソロモン神殿が建設されて33年間ヤハヴェ神の神殿として輝きを放っていましたが、その後ローマ帝国の兵士に破壊された事、またイエスキリストの生涯も33年間でありました。

ちなみにフリーメーソン日本支部のグランドロッジが東京の浜松町にあります。その隣にそびえ立つ東京タワーの高さは333メートル、竣工は昭和33年の天皇誕生日です。

少し話がそれてしまいましたが、アルバート・パイクが1871年にイタリアの革命指導者ジュゼッペ・マッッチーニに送った書簡が有名なので、紹介したいと思います。

この手紙には、次のように書かれていました。

## 「世界を統一するために今後3つの世界大戦と3つの大革命が必要だ」

「第一次世界大戦は、ツァーリズムのロシアを破壊し、広大な地をイルミナティのエージェントの直接の管理下に置くために仕組まれることになる。そして、ロシアはイルミナティの目的を世界に促進させるための“お化け役”として利用されるだろう。」

手紙が送られたのが1871年。第一次世界大戦が始まったのが43年後の1914年です。第一次世界大戦では、ロシアは連合国の一員として、ドイツ・オーストリアと戦いましたが、敗北を重ねて領土深くまで侵攻されました。

そして、第一次世界大戦中の1917年に起こったロシア革命でロマノフ王朝は倒された。この時、ロシア革命を起こすべく、地下深くで活動し、革命勢力に資金援助を行ったのが、ユダヤ国際金融財閥のロスチャイルドと、日本政府から送り込まれた諜報部員の明石元二郎陸軍大佐です。

「第二次世界大戦は、『ドイツの国家主義者』と『政治的シオニスト』の間の圧倒的な意見の相違の操作の上に実現されることになる。その結果、ロシアの影響領域の拡張と、パレスチナに『イスラエル国家』の建設がなされるべきである。」

第二次世界大戦が始まったのが1939年。手紙が送られた68年も後のことで、「ドイツの国家主義者」をナチス、「政治的シオニスト」をユダヤ人に置き換えると、歴史はその通りになっている事が分かります。

「**第三次世界大戦**は、シオニストとアラブ人とのあいだに、イルミナティ・エージェントが引き起こす、意見の相違によって起こるべきである。世界を統一するには3回の戦争が必要であり、1回目はロシアを倒すために、2回目はドイツを倒すために。3回目はシオニストとイスラム教徒がお互いに滅し合い、いずれ世界の国々もこの戦争に巻き込まれ、それが最終戦争に結びつくだろう」

というのですが、まさに今日の中東情勢をみると、その通りに進んでおり、イラン問題から、日米英豪 vs 中露の構図ができあがり、尖閣諸島・台湾問題を引き金に日本と中国が戦争になる可能性も十分にありえます。

シナリオはこうです。アメリカ背後に、日本は尖閣諸島国有化宣言、中国は激怒し、日本をミサイル攻撃、日本はパトリオット/PAC3で反転攻勢、中国は日本を猛攻、日本は応戦、そして日中戦争に拡大。**見よ、戦争仕掛人どもの、おぞましい煽動を!!**

今、世界の富は、日本と中国に集まっており、この地球上では、長く続いた白人支配は終

焉を迎えようとしていますが、彼らがそれを時代のトレンドだといって、簡単に認めるとは思えません。ここで、中国と日本が戦えば、工場を潰しあい、欧米の産業界は復活のチャンスを迎えます。また冷戦後、リストラの続く欧米の軍需産業にとっては、この金持ちの両国の戦いには、**笑いが止まりません**。さらに、中国と日本の国力が疲弊すれば、再び白人支配を取り戻すことができます。

また、中国にとっては軍事的に日本支配をするチャンスでもあり、資本主義経済で大金持ちになった中国の富裕者層にとっては、**この混乱に乗じて中国共産党を倒すチャンスでもあります**。

**なによりもメリットが大きいのはアメリカで**、この混乱に乗じて、得意の圧倒的軍事力を行使でき、世界制覇も不可能ではありません。**それと、天文学的な借金を、ドルを暴落させチャラにし、金兌換？の新通貨AMEROに切り替える大きなチャンスでもあります**。

中東発の世界的な大混乱は、まさしく第三次世界大戦を引き起こす引き金となり、宗教的にもハルマゲドンにより、救世主マフディ(イスラム教)、イエスキリスト(キリスト教)の降臨を実現させ、ミレミアムキングダム(至福の千年王国)の到来を待っているのが、今日のイランの旧アフマディネジャド大統領派と、アメリカのブッシュ大統領親子・**S & B**一門です。

第三次世界大戦の後には、何があるのでしょうか。それは世界統一宗教(フリーメーソンのような啓蒙思想的な擬似宗教)と、世界政府による**「新世界秩序」**なのであろうか!!。

**「これらの混乱の時から、我らの目的、新世界秩序は現れることが出来るのだ。」**

アメリカ大統領ジョージ H.W.ブッシュ 1990 年 9 月 11 日 国連演説

**次の一文が「第三次世界大戦」の『核』である。**

## その2 エール大学 **S & B**



スカル・アンド・ボーンズのエンブレム

従来、アメリカの政界を牛耳っていたのはハーバード大学卒ですが、最近ではブッシュ親子、クリントン夫妻、ケリー元大統領候補、チェイニー元副大統領など、エール大学派閥勢力が強くなってきました。

エール大学には、エリート中のエリートしか参加が許されない秘密結社、**「スカル・アンド・ボーンズ」**、「スクロール・アンド・キー」、「ブック・アンド・スネーク」、「ウルフズ・ヘッド」、「エライアフ」、「ベルゼリアス」などがありますが、中でも**「スカル・アンド・ボーンズ」**が強い影響力を持っています。



この写真は、S & B(スカル・アンド・ボーンズ)の 1947 年の集合写真です。ジョージ・H・W・ブッシュが時計の左にいるのが分かります。

**S & B**は、17 世紀末にオックスフォード大学のオール・ソウルズ・カレッジに設立されたフリーメーソン秘密結社に由来するものであり、エール大学内の秘密結社です。

ニューイングランド地方にある約 20 ほどの家系が、この秘密結社の中核をなしており、これらは 17 世紀にアメリカに渡って来た清教徒たちの子孫で、ホイットニー、ロード、ヘルプス、ワズワース、アレン、バンディ、アダムス、スチムソン、タフト、ジルマン、バーキンスなどというファミリーがあります。

後に、ハリマン、ロックフェラー、ペイン、デビソン、フィルスベリー、ウエーヤーハウザーなどの資本家たちもメンバーとして加わっています。

**S & B**メンバーであるブッシュ大統領を見ても分かりますが、簡単に戦争を起こす **S & B** の思想は危険です。

これはどこから来ているかと言えば、**S & B**の創立者、ウィリアム・ラッセルは 1831-32 年にドイツ留学していますが、このときに流行していたヘーゲル哲学(国家主義)に強く影響されて、**S & B**の目的を国家主義に基づく「新世界秩序」としています。

当時ヨーロッパは、ナポレオンに支配されたショッキングな時代で、ドイツではナポレオンに負けたのは個人が利己主義で国家の事をあまり考えなかったからだという反省機運が高まっており、その反動で国家主義がうまれようとしていた時期でした。後のマルクスの革命思想やヒトラーのナチス、ファシズムにも大きな影響を与えています。

ヘーゲル哲学では、

**「国家こそ絶対理性であり、国家の絶対性の前には、個人は無いという命題を持つ・・・」**という非常に危険なもので、さらに国民に国家意識を持たすためには一人の大統領の任期中に 2 回くらいは戦争をやらなければならないという馬鹿げた考えを基本に持っているのが、今日の共和党の大統領です。

また、**S & B**はミュンヘンに設立された秘密結社トゥーレ協会とも密接に関係がありますが、この協会はゲルマン騎士団のバイエルン支部として設立され、この協会のマークは剣とナチのハーケンクロイツです。

**S & B**は超国家主義で、ナチスを生み出した思想のヘーゲル哲学に深く関係があり、現に **S & B** 思想信奉したロックフェラーやブッシュの祖父はナチスに巨額の資金援助していました。ナチの資金源の多くは、アメリカの彼らからのものだったのです。

エール大学の **S & B** の歴史は、中国とのアヘン貿易に遡ります。

アヘン貿易を最初に仕切っていたのは、イギリスの名門のベアリングズ兄弟商会(クエーカー教徒)で、その実行部隊がイギリス東インド会社で、18 世紀以来のアヘン貿易に圧倒的な強さを見せたベアリングズ兄弟商会も衰退してゆき、19 世紀初頭にはロスチャイルドの台頭によりアヘンの権益を二分するようになりました。

その結果、ロスチャイルドとベアリングズ兄弟商会の双方が窓口となって、阿片の権益の一部をカボッツ、クーリッジ、フォーブス、ヒギングソン、スタージス、ロッジ、ローウエル、パーキンス、ラッセルなど当時ニューイングランド州にあった商人の一族たちに供与することになり、アヘン貿易で手を結んだこれらの金融・商業資本家たちが、その後ユナイテッド・フルーツ・カンパニー(のちのチキータ)やボストン銀行を設立しました。

たまたま、その中にラッセル家、パーキンス家という二つの**スカル・アンド・ボーンズ**メンバーがいて、これらのファミリーが**スカル・アンド・ボーンズ**への資金の窓口を務めることとなります。

アヘン貿易で莫大な富を手にしたのは、イギリス東インド会社、ジャーディン・マセソン商会、テント商会、バイパスブラザーズ、アメリカのラッセル商会、カマ・ブラザーズ、アソル伯爵夫人、バルカラス伯爵、イギリス王室ジョージ四世、などですが、ラッセル商会は、サミュエル・ラッセルが設立しましたが、エール大学の創設者の一人がこのラッセル一族のノディア・ラッセルで、従兄弟のウイリアム・ラッセルとタフトがエール大学内に**S & B**を創設しました。

このタフトの息子のウイリアム・ハワード・タフト(共和党)が、**スカル・アンド・ボーンズ**の、第27代のアメリカ大統領(1909-1913)です。

このように、エール大学**S & B**、ボストン銀行、香港上海銀行は中国のアヘン貿易の利益で出来たようなもので、ブッシュ家も含めて、アメリカの名門ファミリーも、アヘン貿易で富を得たのです。

現在、イギリスの海運貿易業界の最大の企業は、「ペニンスラー・オリエント航海会社」、通称「P.O汽船」ですが、この会社が設立されたのはアヘン戦争時で、創始者は、ベアリング家とインチケイブ卿です。インチケイブ卿は、香港上海銀行の主要株主でもありました。

この「P.O汽船」はアヘンを運ぶだけではなく、アヘン常用者の中国人苦力(クーリー)を奴隷としてアメリカに運びました。1846年には既に約12万人のクーリーが、ハリマン鉄道の西方延長工事に従事しておりました。

鉄道建設工事が終わっても、中国人クーリーたちは帰郷せず、サンフランシスコ、ロサンゼルス、バンクーバー、ポートランドに定住し、地元のアメリカ人たちと大きな摩擦を起こしながらも、中国人街(チャイナタウン)を形成してゆきました。

**S & B**のエンブレムは、海賊船になびかせていたドクロの旗のマークと同じですが、まさしくアヘン貿易で大きな富を得た、イギリスやアメリカ東部の名門エスタブリッシュメントたちのやってきた事は海賊、そのものであると思います。

**註** このエール大学 **S & B**の一員が、現エール大学教授浜田宏一である。浜田宏一は、安倍晋三が、森・小泉政権で官房副長官を務めたときの内閣府経済社会総合研究所長であり、現在の「アベノミクス」の生みの親である。つまり、**S & B**の血脈が、ブッシュ親子・浜田宏一をして森・小泉・安倍の売国在日勢力に受け継がれ、**亡国日本を迫っている**のである。

### その3 ジョンズ・ホプキンス大学

あまり日本では知られておりませんが、メリーランド州ボルチモアにある、ジョンズ・ホプキンス大学は、医学の分野で、ハーバード大学と双璧をなす名門校であります。

心理学や哲学の分野では、フロイトを輩出したウィーン大学や、デリー大学の哲学科が世界の超一流とされていますが、ジョンズ・ホプキンス大学の心理学研究も世界に知られており、「**麻薬によって人間をロボット化する研究**」、「**電磁波を使って人間の脳をコントロールする研究**」、「**核兵器の恐怖により人間を支配する研究**」などが有名です。

また第二次世界大戦では「日本人の戦意を喪失させる研究」を行い、**東京大空襲・広島・長崎**

への原爆投下の計画は、**ジョンズ・ホプキンス大学**で練られたもので、これは「一般市民が、どの位、大量虐殺されれば、その国の国民、軍部が戦意を失うか」という心理戦争の効果を実験・検証するもので、この作戦は「**プルデンシャル一般大衆爆撃**」と命名され、作戦の指揮をとっていたのは、ルーズベルト大統領直属の「**心理戦争局**」の局長エイプリル・ハリマン(**ハリマン銀行社長**)であります。

脳みその足りないメディア関係者が、よく東京大空襲や原爆投下は民間人を対象としたホロコーストではなかったかと、まるで大それたことでも発見したかのように騒ぎ、議論しておりますが、小学生でも分かる当たり前の事です。

こんな程度で、職業としてお金を稼げるのだから、楽な商売だなと思うと同時に、いつもながらに、あまりのアホさにあきれ返るばかりです。

東京大空襲、また原爆を落とせば、大量の民間人が死傷することくらい、アホでも分かりますが、**アメリカは「プルデンシャル一般大衆爆撃」で、プルデンシャル生命保険の研究員達を現地にスパイとして潜入させ、東京大空襲、広島、長崎への原爆投下の後の社会心理調査を行い、ジョンズ・ホプキンス大学の心理戦争の効果を実験、検証していたわけです。**

フリーメイソンであったルーズベルト大統領の直属組織「心理戦争局」の局長が何故ハリマンかと言えば、黒人、日本人等の黄色人種を「絶滅」させるため、エイズ、天然痘、コレラ等の生物兵器を研究してきたニューヨークのハリマン優生学研究所を、そのまま大統領直属の組織に編成したものであったからです。

優生学研究所の研究員エルンスト・ルーディンは、アドルフ・ヒトラーの下でアウシュビッツのユダヤ人大量虐殺を「直接指揮」したナチスの「人種衛生局局長」で、「衛生」の意味は、黒人、日本人をはじめとする黄色人種を「バイ菌」と呼び、その「バイ菌」を絶滅させる事を「殺菌消毒」と呼び、「衛生管理」と呼んでいた事実から来ています。

日本人を絶滅させるなど、馬鹿げていると思われる人も多いかと思いますが、アメリカ大陸に渡ってきたイギリス人たちが、ネイティブ・インディアンに何をやってきたか、思い出して見て下さい。米大陸に**約5000万人**いたとされるインディアンは、虐殺で**約3万人**にまで減っており、**99.94%**のインディアンが虐殺されているのです。

アメリカは、先住民のインディアンを虐殺し、土地を奪い、ただで手に入れた土地の上に鉄道を敷き、その鉄道と駅周辺の商業により、その土地は価値のあるものとなってゆきました。当時は、政府が線路周辺の土地開発権を、鉄道業者に無料で開放したため、鉄道業者が石油、石炭、鉄鉱石などの資源開発により、莫大な利益を得ました。

その過酷な鉄道建設には、中国からの苦力(クーリー)と呼ばれる奴隷が使われました。過酷な重労働を行わせるために、阿片が与えられ、阿片中毒とさせ、逆らえば阿片が与えられない、という、阿片を用いて中国の苦力を従順な奴隷とし、ただ同然の賃金で働かせていました。1823年に、米国の阿片輸入専売会社であるラッセル社が作られましたが、中国の広東で、阿片と中国人奴隷の輸出入を担当した取締役が、ウォーレン・デラノで、そのデラノ一族は阿片の利益で大統領を輩出しますが、その大統領が第二次世界大戦中の、親中反日の**フランクリン・D・ルーズベルト**です。大統領は、中国の阿片・奴隷密売人のウォーレン・デラノの孫にあたります。

ラッセル社の経営陣に、ダニエル・コイト・ギルマンがいましたが、この一族は「阿片でいかに人間をコントロールするか」の研究に没頭し、それが後に心理戦争の概念に発展し、心理戦争の専門研究機関である、ジョンズ・ホプキンス大学が創立されることとなります。

ジョンズ・ホプキンス大学の創立資金は、全額ラッセル社から出資され、ダニエル・コイト・ギルマンは、1865年にジョンズ・ホプキンス大学の初代総長に就任しました。そして、ギルマン一族は阿片で得た財産を、「フーパー研究所・フーパー財団」の形で残しました。

フーパー研究所はレーガン政権で極端な核兵器の軍備拡張をプランしたことでも知られているところですが、これはまさに核兵器による心理戦争を受け持ったわけであります。

現在のアメリカ大統領のブッシュ一族は、このラッセル社の監査役を担当していましたが、イギリスが中国に持ち込んだのがインド阿片であったのに対し、ラッセル社はトルコから阿片を輸入し、中国に送り込み、麻薬中毒にした中国人奴隷を、ハリマン社などのアメリカの鉄道建設に従事させていました。

トルコで、ブッシュ一族の阿片農園を経営していたのが、後にナチスを創立した、ドイツのゼボッテンドルフ一族で、よくブッシュ一族がナチスに支援していたと言われますが、このトルコ阿片でつながっており、ブッシュ政権では露骨な親トルコ政策が行われているのは、この阿片利権と無縁ではないでしょう。

このトルコのゼボッテンドルフ一族の農園を警備し、ゼボッテンドルフ一族と競合する業者を殺害するために雇われていたのが、イスラム過激派テロ組織のアサシンであり、テロ組織アサシンへの阿片提供の見返りに、ブッシュ一族はアサシンに警護され、阿片ビジネスをトルコで安全に行っていたわけです。

アサシンは現代ではアルカイダとなり、9.11 テロでも話題となりましたが、ブッシュ一族とアルカイダの一体化、またそれはアサシンとの一体化を回帰させるものであります。

また、**CIAスパイ養成所として知られる**、名門**エール大学**はラッセル社の阿片利益で創立されましたが、**エール大学の秘密結社スカル&ボーンズ**は、ブッシュ一族と関係が深い事でも有名であります。

**スカル&ボーンズ**の創設者は、ダニエル・コイット・ギルマンで、創立メンバーはギルマンの他、ウィリアム・ハンティントン・ラッセル、アルフォンソ・タフトなどがいます。

この秘密結社は、 Templar 騎士団、フリーメーソン、円卓会議ネットワークなどと密接に結びついていて、**スカル&ボーンズ**のシンボルの髑髏マークは、聖堂騎士団などブラザーフッド系悪魔主義結社の儀式に用いられる髑髏に由来しています。

麻薬・奴隷密売業者ラッセル社の船の旗には、この髑髏マークが常に翻っていました。髑髏の下に 322 という数字がありますが、これは英国では、オックスフォードやケンブリッジやエディンバラなど、各大学に強力な秘密結社が存在しており、強固なネットワークを形成しており、**スカル&ボーンズ**は、1832-1883 年頃にドイツの秘密結社の第 322 番支部として合衆国内に設立されたことに由来します。

当時は「死の兄弟団」と呼ばれていたらしいのですが、コネチカット州にある**エール大学**に「墓」と呼ばれる窓のない建物を、**スカル&ボーンズ**は拠点としており、**今日の世界政治を動かしているのは、東部エスタブリッシュメントの彼らであります。**

**スカル&ボーンズ**を創立したダニエル・コイット・ギルマンは、麻薬で得た財産を減らさないよう、後にロックフェラー財団やカーネギー国際平和基金など、免税権を持つ「財団」制度をアメリカに作りあげました。

**スカル&ボーンズ**には、誰でもが入会できる事は無く、「レプティリアンの遺伝子を受け継いでいるかどうか」が問われます。

そして、世界の権力者たちが公式な場で、我々に見せつけるかの如く出す、悪魔のサイン (Signs of Satan) は何を意味しているのでしょうか？



イギリス最大の銀行 HSBC(香港上海銀行)が中国の阿片ビジネスの利益で創立されたように、アメリカも、中国人を奴隷化した阿片ビジネスで、莫大な富を得ました。

ラッセル社の経営陣の1人にクリーブランド・ドッジがいますが、世界最大の銀行シティバンクは、このドッジ一族とブッシュ一族で経営されていたものです。戦後の日本経済を復興させる代償として、米軍を常駐させ、日本を中国とロシアに対峙させる政策のドッジラインは、デトロイト銀行頭取のジョセフ・ドッジが立案したものです。

また、ラッセル社創立時の取締役、ジョン・フォーブスがいましたが、世界の富豪を紹介する雑誌「フォーブス」は、彼の一族が創刊したものであり、2007年の大統領選挙でブッシュと戦った、民主党のジョン・フォーブス・ケリーも、フォーブス一族です。

名門プリンストン大学も、このラッセル社に協力しながら、単独で阿片を密売して利益をあげたグリーン一族が創立したもので、コロンビア大学もラッセル社の役員をしていたアビール・ロウが阿片の利益で創立したものです。

ラッセル社役員のジョセフ・クーリッジは、クーリッジ大統領を輩出した名門ですが、彼もまた阿片で儲けた利益で、中南米で奴隷を使ったバナナ農園開拓に乗り出し、奴隷たちが反乱をおこさないように、強力な軍隊でスパイ・監視する弾圧組織をつくりましたが、この組織が後にCIAとなってゆきます。

話を日本に戻すと、第二次世界大戦後、トルーマン大統領直属の心理戦争局局長には、ハリマン銀行会長エイブリル・ハリマンが就任し、ジョンズ・ホプキンス大学と連携をとりながら、日本が二度と立ち上がって来れないように、日本人をいかに洗脳し、コントロールするかの研究が行われました。

そうして、こんな簡単なことも洞察できず、いとも簡単に彼らにのせられてしまい、戦争に勝った側に媚びへつらい、尻尾をふっているのが、情けなく、脳みそが足りない、アホ丸出しの反日左翼主義者たちなのであります。

## その4 日本の原爆開発



仁科芳雄 博士 (1890-1951)

1942年6月、フリーメイソンのフランクリン・D・ルーズベルト大統領は、国家プロジェクトとして、原子爆弾の研究開発着手を決意し、1942年9月にレズリー・リチャード・グローヴス准将が責任者として着任し、マンハッタン計画はスタートしましたが、日本では1941年(昭和16年)に、陸軍が理化学研究所に原子爆弾開発を委託し、1943年1月に同研究所の仁科博士を中心に開始されました。もう一方で、日本海軍も1941年5月に京都帝国大学理学部教授の荒勝文策に、原子核反応による爆弾の開発を依頼し、1942年には核物理応用研究委員会を設けて、京都帝国大学と共同で原子爆弾の可能性の検討に入りました。

すなわち、日米共に、ほぼ同時期に原子爆弾の開発プロジェクトをスタートさせた事にな

ります。

日本帝国陸軍と日本帝国海軍の原子爆弾研究のプロジェクトコード名は、「二号研究」と「F研究」で、仁科博士の頭文字「二」と、核分裂(Nuclear Fission)の「F」をとったものです。

原子物理学に関しては、江戸時代生まれの長岡半太郎が、世界で最初に今日の原子構造を提唱し(ボーアは9年後に長岡の原子構造が正しかった事を証明)、以降 彦根忠義、仁科芳雄、荒勝文策、湯川秀樹、朝永振一郎、江崎玲於奈、西澤潤一など、世界をリードしてきました。

何故か日本人で知る人は少ないのですが、世界最初にCPU(メモリー機能を持ち、ソフトウェアによって動くIC)の概念を考え出し、Intel社に技術ライセンスしたのも、ビジコン社の嶋正利です。その契約書まで、今日ではWebでも紹介され、1998年米国の半導体生誕50周年記念大会で、"Inventor of MPU(Micro-Processor Unit)"(マイクロプロセッサの発明者)として表彰も受けております。

話を、原子爆弾開発に戻しますが、日本では1934年に東北大学の彦根忠義が、アインシュタイン、オッペンハイマー、ボーアなど欧米の超一流の科学者がまだ予期していなかった原子物理学理論を打ち立て、いずれそこから引き出されるだろう、巨大な破壊エネルギー、核兵器が誕生する事も予測していました。

しかしながら、彦根の論文は、欧米の学会、またボーアからも無視され、彼らは彦根(日本人)を嘲笑しながら、実はその先端理論を盗んでいたのです。

彦根は、「陽子と中性子が原子核内ではっきり分かれ、しかもその間に、宇宙最大のエネルギーが潜んでいる。だから人類は、それを悪用せずに制御しなければならない」と説いたものの、日本の学界では、彼の考えを理解できず、彼の理論を認めようとしませんでした。

自分に自信が無いから、欧米の一流の学者が認めたら、日本の学界も認めるという体質は悲しいかな現実であります。

日本の物理学界に失望した彦根は、同じ東北大学の研究者の勧めで、米国の物理学会専門誌「フィジカル・レビュー」に、「原子核エネルギー(利用)新法に就いて」という論文まで送っています。

しかしながら、欧米の学会は彼の功績を認めようとせず、むしろ嘲笑し、ボーア博士に直接会って説明しても、認められることはありませんでした。

当時、ボーアの理論では、「陽子と中性子は分かれずに一体になって、ごく小さな液滴の形に似た原子核を作っている」としていたので、これでは核爆発など起こるわけがなかったから、彦根の論文を認めたくなかったのであります。

しかしながら、彼らの行った事は、彦根を嘲笑しておきながら、彦根の功績を盗用し、容陽子と中性子は別れているとし、原子爆弾の開発競争に入ったのです。

その情報をキャッチした、日本政府も、本格的に原子爆弾の開発を着手するようになったわけです。

日本の原子爆弾開発で最も大きな問題は、原料のウランを入手する事が困難であった事で、当時は人形峠のウラン鉱脈も知られておらず、福島県石川町などでは閃ウラン鉱、燐灰ウラン石、サマルスキー石などが採掘されましたが、含有量の少ない物がごく少量採掘されるだけであったのです。

すなわち、原子爆弾1個に必要な臨界量以上のウラン235の確保は絶望的な状況であったわけです。そのため、日本海軍は上海の闇市場で酸化ウランを購入したり、ナチスドイツから二酸化ウラン(U235)入手を試み、日本海軍庄司元三技術中佐と友永英夫技術中佐、ドイツ空軍ウーリッヒ・ケスラー大将、海軍士官4名、ドイツ人技術者2人などを日本に送り届ける任務をうけて、潜水艦U-234に酸化ウラン(U235)560kgを積み、キール軍港を出港しました。

しかしながら、1945年5月8日、日本に向かうU-234は、大西洋上でドイツ無条件降伏の打電を受けました。Uボート乗員たちは討議の末、日本人士官二人を監禁し、洋上で米軍の米護衛駆逐艦「サットン」SUTTON (DE 771)に降伏しました。

560Kgの酸化ウランは大きな量に思われるかも知れませんが、濃縮ウラン 3.5kg 相当に過ぎず、原爆に必要な 50kg には到底及ばない量であります。

ともかく、原爆 1 個すらに必要なウランを入手できない日本において、原子爆弾の開発は現実無理であり、昭和 20 年(1945 年)5 月 15 日のアメリカ軍による空襲で理化学研究所の熱拡散塔が焼失したため、研究は実質的に続行不可能となり、同 6 月に陸軍が研究を打ち切り、7 月には海軍も研究を打ち切り、ここに日本の原子爆弾開発プロジェクトはなくなりました。

そして日本は、アメリカによる 1945 年 8 月 6 日の広島市への原子爆弾投下、8 月 9 日の長崎市への原子爆弾投下で決着はつき、9 月 2 日にポツダム宣言受諾の降伏文書に調印。

日本の科学技術力に脅威を感じていたアメリカは、自分たちが原爆等他でやられる前に、「ガーター騎士団」である天皇家との密約により、故意に「無条件降伏」を突きつけ、日本軍部に「本土決戦」を煽り、原爆完成まで戦争を引き延ばし、完成直後、たった一度の原爆実験(トリニティ実験)のみで、広島・長崎に『悪魔の卵・原子爆弾』を投下し、虐殺の人体実験をしたのです。

## 悪魔の卵



原子爆弾・ファットマン

私(新村)は、誰が原爆を作り、誰が国際法・ジュネーヴ条約を無視・違反して、我が国の広島・長崎に原爆投下したのかを問うつもりはない。私が問うているのは、原爆という悪魔の兵器を作り、人々の頭上に投下し、その殺戮によって『屍姦』を弄んだ、金権亡者(悪魔)の「魔性」を問っているのである。この「魔性」の正体こそ『生け贄の冠』⇒ノーベル賞であり、ニセモノ(メッキ)の金銀銅メダルなのである。桂冠の五輪は『馳の狂騒』なのだ。

アメリカは猛省すべきである。アメリカ・インディアン 5000万人を虐殺し、更に、日本人を原爆で虐殺した「魔性」を!!。アメリカの一つ目小僧よ  お前が『悪魔』なのだ!!。

**根絶**

**六大差別**

宗教・人種・文明・制度・職業・貧富

**日本義塾 主宰 新村紘宇二**